

明日の暮らし、ささえあう

CO-OP 共済



地域ささえあい助成

— 生協と他団体が協同する活動を応援します —

2017年度 活動報告集

日本コープ共済生活協同組合連合会

はじめに

日本コープ共済生活協同組合連合会（以下、コープ共済連）では、社会貢献活動として2012年度に「CO・OP共済地域ささえあい助成」を開始し、2017年度に6年目を迎えました。

生協は、くらしを向上させることを目的に事業を進めていますが、昨今の少子高齢化、貧困など、くらしに関する困難は、地域社会全体に目を向け、他団体・行政とも一緒になって必要な取組みを行わなければ解決できない状況になってきています。そのため、本助成では、生協と他団体がネットワークを形成しながら問題を解決していく活動を支援することにしており、あわせて、次の3つのテーマにそった取組みを助成の対象としております。

①くらしを守り、くらしの困りごとの解決に資する

②命を守り、その人らしい生き方ができるようにする

③女性と子どもが生き生きする

2017年度は63件のご応募をいただき、審査委員会において42件、2,492万9,950円の助成を決定しました。なお、選定にあたっては次の選考基準を設け審査を進めました。

選考基準

- ①生協と地域他団体との協同により成り立つ活動であること、②計画の実現性、③予算計画の妥当性、④対象者のニーズに基づく活動であること、⑤多様な地域住民の関わりや参加度、⑥活動の新規性や先駆性

※過去に助成を受けたことのある団体では、取組みの発展性にも着目しました。

※協同の取組みができていないかという点では、他団体と協同することで新たな広がりが期待できるか、または、生協がしっかり役割を発揮できているかを着眼点としました。

✳活動6年目を迎えて

本助成は2017年度で6年目を迎えました。協同の輪の広がりを感じさせる実践的活動の申請が多くみられ、助成金満額の100万円の助成団体は昨年の7団体から9団体に増えました。9団体のうち6団体は新規に応募を受け付けた活動で、昨年に引き続いてフードバンク等の新たな活動で、且つ生協との役割も明確なものについて、減額することなく助成することとなりました。しかしながら、一部には従前の内向きの行事的活動も見られました。上記の選考基準を参考に、次年度以降の応募では、より発展的な活動を申請されることを期待します。

2017年度は、助成団体や応募を検討している団体を対象に、2016年度に引き続き2回目となる団体交流会を開催しました。東京と大阪の2会場で計95名にご参加いただき、参加者からは「発表事例の中から、これからの活動のヒントが得られた」「生協単体だけではなく、地域住民や専門職の人達と協力しながら活動していくことが大事だということがよくわかった」など、前向きな意見が数多く聞かれました。住環境が急激に変化する地域の中で、団体交流会から学び取った協同の力を生かし、住民の皆さんを巻き込んだコミュニティの再構築を実践されることを期待します。

✳さらなる発展を目指して

今日、求められる地域共生社会づくりの活動は、生協とともに活動する団体との連帯が不可欠であり、本助成がそのきっかけづくりになることを切に願います。そのために、地域でのネットワーク形成の促進や助成応募がより活発になるよう、2018年度も団体交流会を開催し、助成の条件の一つである「協同の取組み」について、具体的なモデルを明らかにしていきます。今後も、生協と地域の団体が一緒になって取り組むことにより、地域に根差した活動がさらに促進されることを期待しています。引き続き、皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

2017年度 CO・OP共済 地域ささえあい助成 審査委員会
委員長 上野谷 加代子（同志社大学 社会学部 教授）

はじめに	1
------------	---

2017年度 CO・OP共済 地域ささえあい助成 審査委員会
委員長 上野谷 加代子(同志社大学 社会学部 教授)

2017年度「CO・OP共済 地域ささえあい助成」助成先一覧	4
--------------------------------------	---

活動報告集



① 暮らしを守り、暮らしの困りごとの解決に資する

■ 生活協同組合コープしが 生協と社協による住民の暮らしを支えるプロジェクトⅡ(実践編)	7
■ 医療生活協同組合やまがた(上郷支部) 鶴岡市の総合支援事業への挑戦、たまり場「ちよさんの家」の取り組み	8
■ 特定非営利活動法人 フードバンク信州 本部拠点の強化	9
■ NPO法人 フードバンク八王子えがお 食に困る人々を地域で支えるためのフードドライブ活動	10
■ 特定非営利活動法人 フードバンクふじのくに 協同で命と環境を守るフードバンク活動	11
■ 東京西部保健生活協同組合 高齢者のたまり場、認知症カフェと子ども無料塾	12
■ ボランティア団体「ハートハース」 安心をはぐくむ居場所づくり	13
■ みやけじま 風の家 コミュニティー支援活動	14
■ 特定非営利活動法人 きょうどうのわ なんでも相談サロンPartⅢ	15
■ 地域つながりセンター 諸団体・行政と協働ですすめる「安心してすみつけられる地域づくり」	16
■ 大阪よどがわ市民生活協同組合 吹東・幸ブロック 介護フェア	17
■ 京都生活協同組合 (地域で)家の整理・片づけ・不用品処分を学び教え合う会	18
■ 特定非営利活動法人 キッズドア コープみらいプラザを活用した低所得の子どもたち向けの通年型無料学習会の実施	19
■ 生活協同組合コープあおもり 福島の子どもの保養プロジェクト コープあおもり in ねぶたツアー	20
■ 特定非営利活動法人 しんせい 被災弱者を包み支え合うコミュニティづくり	21
■ ろっこう医療生活協同組合 神戸の名産のイカナゴのくぎ煮を組合員の手で作し、東北の被災地に持参し、被災者に手渡す。併せて話を傾聴する	22

② 命を守り、その人らしい生き方ができるようにする

■ 生活協同組合おおさかパルコープ 鶴見福祉センター運営委員会 鶴見福祉センター開設5周年を記念し、地域にさらに広げ必要とされるたまり場づくり	23
■ 一般社団法人 WiTHs 多世代で知る・実践する健康教室	24

■非営利公益市民活動団体 コミュニティマーガレット ノルディックウォーキングプロジェクト2017	25
■フードバンクちば いのちをつなごう～フードバンクちば・生活協同組合連携キャンペーン	26
■きらくクラブ みんなで作ろう！私たちの居場所「きらくクラブ」	27
■東京西部保健生活協同組合 東京に、どんぐりから育てて、常緑樹のいのちの森をつくろう！	28
■鹿児島県生活協同組合連合会 鹿児島県における「生活支援」の実践交流の場と情報ネットワークづくり	29
■一般社団法人 やまなし空と風 ほくとProof of Lifeプロジェクト（人それぞれの生きる証をみつける活動）	30
■富山県生活協同組合連合会 福島子ども保養プロジェクト in とやま2017	31
■生活協同組合コープ自然派奈良 原発事故被災者の「保養の旅えんむすび」避難者交流会[紅茶の時間]	32



③ 女性と子どもが生き生きする

■特定非営利活動法人 いなほ 地域住民が主体となって行う子どもの健全育成等を目的とした共生型「子ども食堂」の運営支援事業	33
■特定非営利活動法人 ユースコミュニティ 地域子ども未来塾（低学力など、学習環境に困難を抱える子どもの学習教室）	34
■新潟県立大学 南相馬市子ども支援プログラム 南相馬市児童クラブにおける「交流おやつタイム」を活用した継続支援プログラム	35
■青森県民生活協同組合 生協店内での子育て応援 遊び場づくり	36
■まんまるママいわて 助産師と母親がつながる、子育ての居場所づくり事業	37
■特定非営利活動法人 エー・ビー・シー野外教育センター 子育てママの「心も体も気軽な学び場」事業	38
■生活協同組合コープこうべ コープは～とらんどハイム本山 ふれあい 春まつり ～子どものまつりづくり～	39
■NPO法人 ファザーリング・ジャパン関西 家族みんなが大喜び！頼りになるパパ育てプログラム2017	40
■ISC糸島スポーツクラブ コミュニティカフェ寄り合い処プロジェクト	41
■生活協同組合コープみらい 地域クラブひだまり いじめ・不登校・ひきこもりから地域・社会のつながりへ	42
■特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫 地域ネットワークを活かした「共助」し合える居場所づくり～ここからカフェ～	43
■ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟 生協職員・組合員及び地域住民に対して、女性へのDV被害をはじめとする 人権侵害防止の啓発及び相談・支援事業	44
■参画ネット なら DV被害者のための笑顔回復プラン～こころのケアと相談事業～	45
■特定非営利活動法人 ポトスの部屋 子ども・若者への居場所の提供と生活困難家庭の中学生らの学習支援並びに相談活動	46
■NPO法人 福島子どもたち香川へおいでプロジェクト 福島とその近県の子どもの保養プログラムと避難者支援および広報・啓発活動	47
■NPO法人 福島SAND-STORY 福島県の子どもの肥満防止等健康づくりのための屋外遊びと生活改善プロジェクト	48

2017年度 CO・OP共済 地域ささえあい助成 助成先一覧

1 暮らしを守り、暮らしの困りごとの解決に資する

■ 生活協同組合コープしが

- 《協同団体》
- 高島市社会福祉協議会

■ 医療生活協同組合やまがた（上郷支部）

- 《協同団体》
- 鶴岡市上郷地区自治振興会
 - 鶴岡市大谷自治会
 - 大広熊野長峰MG研究会
 - 生活協同組合共立社

■ 特定非営利活動法人 フードバンク信州

- 《協同団体》
- 長野県生活協同組合連合会
 - 長野県NPOセンター
 - 長野県労働者福祉協議会

■ NPO法人 フードバンク八王子えがお

- 《協同団体》
- 生活協同組合コープみらい地域クラブ「えがおのおすそわけ」
 - 生活協同組合コープみらい
 - NPO法人 フードバンク八王子えがお

■ 特定非営利活動法人 フードバンクふじのくに

- 《協同団体》
- 生活協同組合ユーコープ

■ 東京西部保健生活協同組合

- 《協同団体》
- 杉並区社会福祉協議会
 - ケア24阿佐ヶ谷 ●退職者教員の会

■ ボランティア団体「ハートハース」

- 《協同団体》
- 奈良市社会福祉協議会
 - 奈良教育大学次世代教員養成センター
 - 市民生活協同組合ならコープ

■ みやけじま 風の家

- 《協同団体》
- 三宅村役場
 - 東京都生活協同組合連合会
 - 東京災害ボランティアネットワーク

■ 特定非営利活動法人 きょうどうのわ

- 《協同団体》
- 生活協同組合コープこうべ 第3地区活動本部
 - 神戸市東灘区社会福祉協議会

■ 地域つながりセンター

- 《協同団体》
- 島根県農業協同組合（本店）
 - 島根県農業協同組合（くにびき地区本部）
 - 松江保健生活協同組合 ●生活協同組合しまね
 - 島根県社会福祉協議会 ●松江市社会福祉協議会
 - ひかわ医療生活協同組合 ●出雲医療生活協同組合
 - おたがいさままつえ ●おたがいさいまいずも
 - おたがいさま雲南 ●すまいリーネット
 - 古志原公民館

■ 大阪よどがわ市民生活協同組合

- 《協同団体》
- 吹田市社会福祉協議会
 - 吹三・東地域包括支援センター ●地区福祉委員会

■ 京都生活協同組合

- 《協同団体》
- 京都市上京区社会福祉協議会
 - 京都市 乾隆地域包括センター ●ジョイ健活 上京

■ 特定非営利活動法人 キッズドア

- 《協同団体》
- 生活協同組合コープみらい
 - 中野よもぎ塾 ●子どもほっとネット in なかの

■ 生活協同組合コープあおもり

- 《協同団体》
- 青森中央学院大学 ●青森保健生活協同組合
 - 福島県生活協同組合連合会

■ 特定非営利活動法人 しんせい

- 《協同団体》
- 生活協同組合コープふくしま
 - 認定NPO法人 AAR 難民を助ける会
 - ふくしま園芸作業療法研究会

■ ろっこう医療生活協同組合

- 《協同団体》
- 特定非営利活動法人 花たば ●こうべ保健サービス

（16団体）8,953,360円

2

命を守り、その人らしい生き方ができるようにする

■ 生活協同組合おおさかパルコープ 鶴見福祉センター運営委員会

《協同団体》

- 榎本地域活動協議会 13町会
- 生活協同組合ヘルスコープおおさか

■ 一般社団法人 WITHs

《協同団体》

- 生活協同組合コープこうべ 福祉介護事業部

■ 非営利公益市民活動団体 コミュニティマーガレット

《協同団体》

- ネット五條
- 奈良県医療福祉生活協同組合 南和委員会

■ フードバンクちば

《協同団体》

- 生活クラブ生活協同組合（千葉）
- なのはな生活協同組合
- 生活協同組合パルシステム千葉
- 生活協同組合コープみらい
- 千葉県生活協同組合連合会

■ きらくクラブ

《協同団体》

- 生活協同組合ユーコープ かながわ
たすけあいネットワーク

■ 東京西部保健生活協同組合

《協同団体》

- 世田谷区
- NPO 建築ネットワークセンター
- NPO 森びとプロジェクト委員会

■ 鹿児島県生活協同組合連合会

《協同団体》

- 鹿児島県社会福祉協議会
- 鹿児島県
- 曾於市・鹿児島市

■ 一般社団法人 やまなし空と風

《協同団体》

- 生活協同組合ユーコープ やまなし県本部

■ 富山県生活協同組合連合会

《協同団体》

- あさひふるさと体験推進協議会
- グリーンツーリズムとやま

■ 生活協同組合コープ自然派奈良

《協同団体》

- 保養の旅 えんむすび
- nara-action
- 特定非営利活動法人 奈良NPOセンター

(10団体) 6,247,140円

3

女性と子どもが生き生きする

■ 特定非営利活動法人 いなほ

《協同団体》

- 岩手県生活協同組合連合会 ●滝沢市社会福祉協議会
- わらしゃん丼 ●ママごはんクラブ

■ 特定非営利活動法人 ユースコミュニティー

《協同団体》

- 生活協同組合パルシステム東京
- 大田区社会福祉協議会 ●セカンドハーベストジャパン

■ 新潟県立大学 南相馬市子ども支援プログラム

《協同団体》

- 生活協同組合コープにいがた ●南相馬市教育委員会

■ 青森県民生活協同組合

《協同団体》

- あおぞらフォト
- 子育てオーダーメイド・サポートこもも

■ まんまるママいわて

《協同団体》

- いわて生活協同組合

■ 特定非営利活動法人
エー・ビー・シー野外教育センター

《協同団体》

- グリーンコープ生活協同組合おおいた
- ワーカーズ・コレクティブ キッチンスタジオ すまいる
- 社会福祉法人グリーンコープ
福祉サービスセンター であい・ふれあい

■ 生活協同組合コープこうべ

《協同団体》

- 東灘こどもカフェ ●合同会社こどもみらい探求社
- ろっこう医療生活協同組合にじいるクリニック

■ NPO法人 ファザーリング・ジャパン関西

《協同団体》

- 大阪いずみ市民生活協同組合
- 藤井寺市民生活部 協働人権課
- 藤井寺市人権のまちづくり協会 ●堺市
- 学校法人松本学園 菩提幼稚園
- うちの買い方相談室 大阪 ●岸和田市社会福祉協議会
- 岸和田市ボランティア連絡協議会 ●大阪狭山市
- 大阪狭山市立公民館 ●大阪狭山市人権協会

■ ISC糸島スポーツクラブ

《協同団体》

- グリーンコープ生活協同組合ふくおか いとしま店
- コミュニティカフェ&デリ ことこと
- いとすき講師会
- 九州大学 次世代ものづくりプロジェクト

■ 生活協同組合コープみらい 地域クラブひだまり

《協同団体》

- 不登校問題を考える東葛の会『ひだまり』
- 青空の会(我孫子)
- 学校に行かない子を持つ親の会 吉川

■ 特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫

《協同団体》

- 生活協同組合コープこうべ 第7地区活動本部

■ ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟

《協同団体》

- NPO法人 女のスペース・にいがた

■ 参画ネット なら

《協同団体》

- 市民生活協同組合ならコープ
- ならコープ 男女共同参画研究会 いこ〜る

■ 特定非営利活動法人 ポトスの部屋

《協同団体》

- みなと医療生活協働組合
- あいち定時制・通信制父母の会 ●ポンペミンタル

■ NPO法人 福島の子どもたち
香川へおいでプロジェクト

《協同団体》

- 香川県 ●高松市 ●香川県教育委員会
- 高松市教育委員会
- 生活協同組合コープ自然派しこく
- 香川大学ローターアクトクラブ ●香川大学写真部
- 香川医療生活協同組合へいわこどもクリニック

■ NPO法人 福島SAND-STORY

《協同団体》

- 生活協同組合コープふくしま
- NPO法人 いわき鳴き砂を守る会
- 福島駅前元気プロジェクト委員会

(16団体) 9,729,450円

※一部、申請金額より減額により助成とする。

総合計 (42団体/応募：63団体)：24,929,950円

テーマ

1

くらしを守り、
くらしの困りごとの
解決に資する



生活協同組合コープしが

活動名 | 生協と社協による住民の暮らしを支えるプロジェクトⅡ(実践編)

活動のきっかけ

生協の協同理念による、組合員主体の助け合いの仕組みや、多様なリソースを生かして、地域ネットワークを有する社協との連携のもと、2016年度に本助成を受けて実施したプロジェクト会議で明らかにした課題に、実際に取り組むこととしました。

活動内容概要

地域で活動する住民、生協組合員と、コープしが、高島市社協の役職員が地域の課題と具体的な取り組みについて、2回にわたり協議するプロジェクト会議を開催しました。プロジェクト会議の全行程に行政職員(地域包括支援課、市民協働課)の方も参加いただき、2回ともワークショップ形式にて、それぞれの視点で地域の実態や課題について共有し、地域を支える取り組みの実践に向けて、地域と生協の資源など、お互いの強みについて共有を進めました。

2回のプロジェクト会議の集大成として、協同の取り組みとして居場所の事例などの掘り起こし、見守り活動・見守り車両ステッカーの作成などの実践課題を整理し、内外に発信することを目的としたフォーラムを開催しました。



協同した団体

◎高島市社会福祉協議会

地域の概要

滋賀県高島市は、人口減少・少子高齢化、単身世帯の増加が進行しており、過疎高齢化によるコミュニティ基盤の脆弱化が大きな課題となっています。10年先、20年先の地域社会を、誰もが安心して暮らしていけるように、多様な主体が連携・協働した、地域生活支援体制の構築が急務となっています。



他団体と協同することで 発見したこと

高島市社会福祉協議会には、地域住民で組織する住民福祉協議会や行政に対して、生協と地域の協働に理解と協力の呼びかけをしていただきました。

見守り活動では「社協と生協はたかしまの見守り活動を協同で推進しています」という『見守り車両ステッカー』を作成し、社協の車両とコープしがの当該の高島センターの車両に取り付けることができ、地域への見える化が進みました。また、拠点整備費の執行により、備品類への「社協と生協の明記」が実現し、末永い信頼関係を築くものに繋がりました。

成果と教訓

成果

【参加者合計171名】

- 地域住民、社協、行政、生協の4者が顔の見える関係を築くことができ、さらに地域課題を共有することができました。
- 休憩時のスライド(ささえあいサポート)や夕食弁当の見本展示、各地区の福祉交流企画パネル展示なども駆使し生協の既存の事業や組合員活動が地域貢献につながっていることを再認識することができました。また非組合員である地域住民はじめ社協、行政、他府県からの参加者にそのことを認識していただく機会となりました。
- 他団体や行政とつながることで、生協も地域の一員として地域を支えることができることを生協内の福祉以外の部署とも共有することができました。また、他府県の行政や社協からの参加もあり、生協と社協の協働づくりという先進的な取り組みとして発信することができました。

教訓

- 社協・行政の職員や地域によっては、生協を営利企業とみる傾向があり、農協などの他の協同組合に比べて、生協の理念などへの理解はあまりありませんでした。プロジェクト会議では生協の福祉に資する活動を前面に取り上げることができ、生協への理解が深まりました。
- 生活協同組合の毎週の配達件数を正確に示すことにより、見守り活動が実際行われていた事例紹介は更なる安心感を高めることを実感できました。特に、生協の委託会社の事例を紹介することで、企業にも社員教育が行き届いており地域福祉に貢献できる存在であることについて、地域への発信ができました。

医療生活協同組合やまがた(上郷支部)

活動名 | 鶴岡市の総合支援事業への挑戦、たまり場「ちよさんの家」の取り組み

活動のきっかけ

鶴岡市は今年4月から介護予防・生活支援総合事業をスタートします。私たちのたまり場も、庄内医療生協として取り組むことにし、市に申請をして準備に取り掛かっています。これまで、地区自治振興会をはじめ、地域の団体や個人との協力・協同の力でやってきました。地元の農山地や人材を生かした里山活用の生きがいがつくり、地域まるごと健康づくり、ささえあい活動を通しての仲間づくりなど、たまり場「ちよさんの家」の目標の更なる発展を目指して取り組んでいきます。

活動内容概要

1. 地域まるごと健康づくりと、主体的健康度アップに取り組みしました
 - (1) 病気になっても寝たきりにならないよう週1回介護予防教室(5年4カ月)
 - (2) 誰でもできる週1回のいきいき百歳体操教室(新設)
 - (3) 医療・介護などの学習会、全地区民に呼びかけた健康講話(6年目)
 - (4) 和尚さんの人生講話、そして柔軟体操を取り入れた出張座禅教室(新設)
 - (5) 温泉場でゲームやおしゃべりで楽しんだ、温泉健康教室(新設)
2. 地域の特色・魅力を生かした生きがいと仲間づくりに取り組みました
 - (1) 90歳近い人も描いている、絵手紙教室(4年10カ月)
 - (2) 山や野を散策し心身をリフレッシュした里山ハイキング教室(4年目)
 - (3) 今年の冬はものづくりに熱中した、趣味・手芸教室(5年目)
 - (4) 笹巻づくりや旬のお魚料理教室などユニークな栄養教室(5年目)
 - (5) アコーディオン伴奏で元気に歌ったうたごえカフェ教室(3年目)
3. 買物に困っている高齢者や地域の人のために、買物支援に取り組みました
 - (1) 週1回の移動せいきょう便、月2回の生協買い物バスの運行(6年目)
 - (2) 買い物に行けない人や高齢者への声かけ、見守り支援の活動(2年目)



協同した団体

- 鶴岡市上郷地区自治振興会
- 鶴岡市大谷自治会
- 大広熊野長峰MG研究会
- 生活協同組合共立社

地域の概要

鶴岡市上郷地域は、世帯数が700戸、65歳以上の人は約30%、医療機関はなく、介護施設は民間1か所だけでとても不便です。また買い物に出かけるにも交通手段がない人たち、一人暮らしで病気の人などは大変困っています。高齢化が着実に進んでいる典型的な農山村地帯です。

全世帯の65%が庄内医療生協及び共立社鶴岡生協の組合員家族になっており、長年、支部や班活動に地道に取り組んできました。「一人ぼっちのお年寄りをなそう」「協力・協同の力で安心して暮らせる地域にしよう」と、2012年9月、空き家を借りて、たまり場「ちよさんの家」をスタート、早4年6か月になります。



他団体と協同することで発見したこと

地元の自治振興会と健康講話を一緒に開催してきましたが、医療生協に関心のない人も多く参加します。また、ちよさんの家の在る地元自治会にはこれまで支援・協力をいただいていたからか、生協や医療生協に対し以前より地域の人たちの温かい眼差しを感じます。このように地元の自治会組織と協同することはとても大事だと思います。

将来イメージ

- ①これまで積み上げてきた教室活動と地元の団体との協同事業を確実に推進し、更に豊かな内容に発展させていきたいと思ひます。
- ②「地域で支え合おう認知症の人を」を合言葉に、認知症予防を身につけ、認知症の人と共に生きる地域づくりに取り組んでいきたいと思ひます。

成果と教訓

成果

- ①地域まるごと健康づくり活動は、2017年度もしっかりと地域の人たちに喜ばれる活動を展開することができました。介護予防教室はいつも10人以上の参加があり、いきいき百歳体操教室も、市の支援事業を開始してから8人前後の参加となり、体力づくりにとても効果が表れたと思ひます。
- ②市が始めた総合支援事業に参加しました。住民主体の通所型サービスBは事業基準が高く、実質ちよさんの家だけという状況でした。私たちの活動が2年目の自治体との協力・連携につながることを願っています。
- ③80歳後半の女性の方が、いつも笑顔で教室活動に欠かさず来るようになりました。何年間も1日中誰とも話さず、家にこもっていたそうです。今は「ちよさんの家に来ると気持ちが晴れます」と息子さんに送られて元気にやってきます。たまり場ちよさんの家をつくって本当に良かったとつくづく思った1年でした。

教訓

鶴岡市がスタートした総合支援事業に必死に取り組んできました。初年度ということで市の事業基準のハードルが高く課題も多く出されました。何とかやりきることができたのは、「ちよさんの家」のこの4年間の実績と、世話人会の協力と団結心があったからだと思ひます。貴重な経験をした1年でした。

特定非営利活動法人 フードバンク信州

活動名 | 本部拠点の強化

活動のきっかけ

豊かな時代といわれるなかで、日本の生活困窮者は増加傾向をたどっており社会的な課題となっている一方で、まだ食べられる食品が流通の過程や家庭生活のなかで廃棄されるいわゆる食品ロスが問題となっています。無駄に捨てられる可能性のある食料の寄贈を受け、食料を必要としている人に無償で提供し、生活困窮者の自立支援に役立てるしくみとして、2016年2月にフードバンク信州を設立しました。

活動内容概要

本部拠点の強化を行いました。



協同した団体

- 長野県生活協同組合連合会
- 長野県NPOセンター
- 長野県労働者福祉協議会

地域の概要

県内の生活困窮者支援機関の窓口からの緊急的な食料支援ニーズには対応できるようになってきました。提供協力企業やフードドライブを行う自治体、団体、活動に参加する市民も増えてきています。

法人設立2年目を迎え、県内全域を対象として安定した事業推進をはかる資金や食料を提供する協力企業や団体の確保、地域の事情に合わせて需給調整のためのネットワークづくり、全体をマネジメントする本部拠点の施設整備や人材の確保など、体制整備が急務となっています。

他団体と協同することで発見したこと

長野県生協連には倉庫・事務所の貸与、長野県NPOセンターには経理事務のサポート、長野県労働者福祉協議会にはフードドライブに協力をいただきました。

事務所家主の長野県生協連にはトイレや床の改修をして貸与いただき、助かりました。拠点の設置にあたり、労働者福祉協議会や全労済から机、キャビネットなどの事務所備品を譲り受けることができました。

他団体と協力することにより活動の協力者の層が広がりました。

将来イメージ

拠点の機能をさらに強化し、現在県内3か所にある地域拠点をさらに増やしていきたいと思います。

成果と教訓

成果

これまで、自前の倉庫、事務所を持っていなかったため、拠点ができて寄贈者や相談者の来訪が増え、事業の進捗に役立ちました。

食品の扱い量は前年の17トンから26トンと、1.5倍に増えました。

教訓

来客用の駐車場の確保が必要でした。

NPO法人 フードバンク八王子えがお

活動名 | 食に困る人々を地域で支えるためのフードドライブ活動

活動のきっかけ

子どもの貧困、ひとり親世帯や高齢者世帯の貧困問題を学んだ10数人の女性たちが、ただ単に知識として学ぶのではなく、学んだからには自分たちでできることは話し合い、フードバンク山梨や狛江の実践を学ぶ中で、2016年3月、「フードバンク八王子えがお」を立ち上げました。“食に困る人々を地域で支えるフードバンク事業”をと、同じ地域に住む者同士、支えあい、労りあってくらす街づくりの一助になればという願いを込めて誕生しました。

活動内容概要

2017年度は6回のフードドライブ（食品寄付呼びかけ活動）を実施しました。

役割分担打合わせ、呼びかけチラシ作成と配布（計36,000枚各戸ポストインと店頭での配布）、これまでの協力者へ郵送での案内を行い、当日は店舗の付属施設でフードドライブを実施しました。

食品は「フードバンクえがお」を経て食に困った方々に月に1回届けるほか、八王子市役所生活自立支援課に支援を求めている方々への手渡し、子ども食堂や児童養護施設と連絡の上必要な援助を行いました。フードドライブ協力者へは、お礼と報告のハガキ送付をしました。暑い夏も寒い冬も献身的な活動が行われました。



協同した団体

- 生活協同組合コープみらい地域クラブ「えがおのおすそわけ」
- 生活協同組合コープみらい
- NPO法人フードバンク八王子えがお

地域の概要

いま、日本の相対的貧困率は、子どもが16.3%、ひとり親世帯の54.6%といわれ、OECD加盟国の下位にあたります。私たちの周囲でも食に困る人々が孤立した状態で多数存在しています。「フードバンク八王子えがお」は、状況を受け“食に困る人々を地域で支える”フードバンク事業をモットーに活動をはじめ、コープ地域クラブ「えがおのおすそわけ」とともに、コープみらい北野台店および城山手店の協力を得て、フードドライブ（食品寄付受付活動）を実施し、多くの住民のみなさんの賛同を得て、食に困る人々を地域で支えることを目的に活動を行います。

他団体と協同することで発見したこと

理解と運動の輪のひろがり、協力者の広がりを強く感じました。この助成申請をする以前の段階のことですが、2016年夏、「コープみらい」都本部は協働の申し入れに対して丁寧に対応し、3店舗に対しきちんと話しを通し、フードドライブ実施を現実のものにしてくださいました。フードバンクの発展にコープとの協働が欠かせないということを改めて教えていただきました。

将来イメージ

最近、大手スーパー等からも消費期限が短くなった食品の提供の相談が寄せられるようになりました。食品廃棄の費用を節約できた上、地域貢献することができるというメリットからと思われます。

コープとの関わりでは、スーパー等とは違い、生協組合員という住民との協働をもって食に困る方々を支えるという「えがお」のめざすフードバンク事業そのものというイメージを描くことができました。店舗とともに、宅配でのフードドライブをより確かなものにして進んで行きたいと思います。

成果と教訓

成果

八王子市には店舗を持った生協はコープみらい（3店舗）だけです。しかし、店舗を持たない宅配中心の生協でも、たとえば、週1のウイークリーでも、品物注文時に呼びかけ、1品余計に購入しフードドライブに寄贈していただく、というある生協での2回の試みは1回平均90kgを超える成果を上げ、他の宅配中心生協にも影響を及ぼしつつあります。

また、店舗を有している「コープみらい」においても、これまでの協力者は、会場近くに居住している方か、車で運べる方に限定されており、店舗の有無にかかわらずコープデリ活動との併用がフードドライブ活動に有効であると学ぶことができました。

2017年度に協力してくれた住民は405名でした。その他「えがお」の会員、地域クラブ「えがおのおすそわけ」会員あわせて延べ175名もの方々がフードドライブ開催にあたって当日はもとより、事前の広報宣伝にあたってくれました。「えがお」がフードバンク事業をはじめて2年、当初は、食品を手にとることそのものに困り、コープでのフードドライブに活路を見出しました。コープを通しての地域への広がりを持つことができたことは、“支え合いといたわりあいに富んだ地域づくり”に向けた「えがお」の今後にとって変え難い貴重な財産となると思います。

教訓

当初は生協でも店舗を持っていないところではフードドライブは不可能と考えていましたが、公民館や学校など創意工夫でどこでも行えることが学ばれました。また、この実践を伝え聞いた他生協等も見学にきていただき、思わぬ広がりをもたらしてくれました。互いの機能を学びあい活かしあえる交流の機会となりました。

特定非営利活動法人 フードバンクふじのくに

活動名 | 協同で命と環境を守るフードバンク活動

活動のきっかけ

当団体は処分せざるを得ない食べ物を有効活用することにより、食料を無駄にせず、食を分かち合い、命や人権を守るため、平成26年5月19日に労福協、生協連、連合、POPOLOなど10を超える団体の協働により発足しました。同年7月に独立行政法人福祉医療機構助成事業「フードバンク活動を利用した食のセーフティネット事業」を開始、同年9月に特定非営利活動法人の認証を受けています。

活動内容概要

毎週1回、個別配送品で発生したキャンセル品・おうちコープで発生したキャンセル品の提供を受けました。夏季・冬季のフードドライブでの静岡県内17店舗での広報活動および回収BOXの設置、食品の回収、フードバンクまでの配送を行いました。

フードバンクではユーコープを含め、他協力団体や個人様より寄贈された食品を年間約3,000件の生活困窮者支援を行いました。



協同した団体

◎生活協同組合ユーコープ

地域の概要

2016年度に助成を受け、静岡県内にあるユーコープ全18店舗で食品の寄贈だけではなく、食品回収ボックスを設置し、市民が気軽に寄付したい食品を持ち込み、それを生活に困っている方に社会福祉協議会、行政、福祉施設を通じて渡す仕組みが一定程度出来上がりました。しかし市民への周知は足りず、ユーコープからのキャンセル品やバックヤード品の寄贈が中心で市民からの寄贈は、まだまだ少ない状況です。

一方で、支援を必要とする方たちからの要請は日に日に増えていて、年間2000件以上の食料支援要請に応える必要があります。



他団体と協同することで発見したこと

ユーコープでの食料品の迅速な配送システムや、食品管理システムなどが参考になりました。

将来イメージ

ユーコープと夏季・冬季のフードドライブを、組合員様・各店舗様と密接に協力し合い、提供食品の拡充と各地域で生活に困っている方への支援を通して、地域の支えあいを熟成させていきたいと思っています。

成果と教訓

成果

本年度はユーコープより、毎週1回の食料品の提供を受け、約2.6トンの食料品を受け取りました。加えて、夏のフードドライブ時には、約635キロ、冬のフードドライブ時には約841キロもの食料品を提供いただき、困窮者支援へと繋げました。

教訓

フードバンクとしては、賞味期限が1ヵ月以上ある食品の提供をお願いしていますが、フードドライブ時など、回収期間が長い場合などは、あらかじめ余裕のある賞味期限の提供を広報していきたいと思っています。

東京西部保健生活協同組合

活動名 | 高齢者のたまり場、認知症カフェと子ども無料塾

活動のきっかけ

阿佐ヶ谷は、2年前から社会福祉協議会のきずなサロンを運営している実績のある地域です。今回、その活動を通じた繋がりから一軒家を借りることができ、阿佐ヶ谷のきずなサロンとは別に新たなきずなサロンとして活動を開始することとしました。すぐ隣に小学校もあり、そのPTAのOBの有志の方（元教師が中心）が無料の学習塾を開講する準備をしていました。

活動内容概要

毎週火曜日13:30~16:00きずなサロン「松下さんち」として開所。高齢者だけでなく、子育て中の若い親子、認知症の夫婦、障害者など幅広い参加があります。

月1回みんなで「みんなでつくってたべる会」を実施しています。偶数月はカレーライス、奇数月は希望のものをつくっており、とても好評でご近所の常連さんが増えています。

また、こどものための無料塾「ワイワイこどものへや」を開所しましたが、曜日が合わず1名の参加にとどまり、開催日や内容について再度検討を行っています。

協同した団体

- 杉並区社会福祉協議会
- ケア24阿佐ヶ谷
- 退職者教員の会



他団体と協同することで発見したこと

協同団体には、地域の状況について情報をいただいたり、地域住民への周知やチラシ配布への協力、定期的な会への参加などしていただきました。

地域では一人暮らしの高齢者がとても増えていることに気づきました。動ける人は病院通いと老人会、ゆうゆう館などお金をかけず、いろいろできるところに通っています。できれば限られた曜日ではなく、毎日開所できると良いとの希望があります。食事は月1回のみですが、とても喜ばれてみんなでいただくこと、食の大切さを改めて発見しました。

将来イメージ

週3日~4日に開所日を増やし、一人暮らしの方などの居場所になるといいと思います。孤食がどの年代でも増えているので、みんなで作って、話をしながら時間を過ごす楽しさを味わえるような活動を更に進めたいです。

成果と教訓

成果

1階のリフォームで部屋がきれいに広がって、おしゃべりや活動のスペースができました。テーブル、椅子、カーテンなど協力者からの提供でだいぶ整ってきました。本天沼に拠点ができたことで、本天沼、下井草、阿佐ヶ谷などいろいろな所からの参加があり、のべ220人の参加がありました。「つくって食べる会」に地元の八百屋さんから食材の提供をいただくことができました。

教訓

毎回新しい方が見えて、「怪我のリハビリ中」「ひきこもっていたのをようやく出てきた」といったように、開いているいろいろな要求を持った人のいこいの場になっていることがわかり、やってよかったと感じます。運営しているメンバーも、それぞれ地域との繋がりが増え知り合いができて楽しんで活動を行っています。学ぶことが多く、自分たちにとっても大切な場所となっています。

ボランティア団体「ハートハース」

活動名 | 安心をはぐくむ居場所づくり

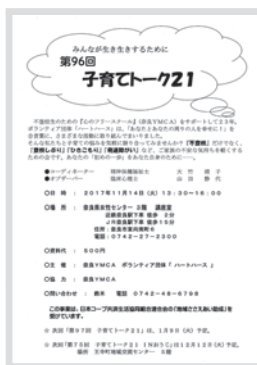
活動のきっかけ

不登校の問題が出始めた1994年の7月、奈良YMCAに行き場のない不登校生のための「心のフリースクール」が設立されたのと同時に、その活動をサポートするためにボランティア団体「ハートハース」が結成されました。

活動内容概要

「ひきこもりサポーター養成講座」終了後結成された「まんまの会」のサポーターとともに、若者の居場所「あなたのまんま」を運営しました。当事者が中心になって運営する「和カフェ」、「洋カフェ」の開催を含む多彩な活動を展開しました。

当事者の家族を支える「親の会」を月一回開催し、グループワークによる自身の気づきを獲得していただくことを目指して、ひきこもりに関して様々な観点から捉えなおすことができました。また、ならこープ学園前のご協力をいただき、回復期にあるひきこもり当事者の社会体験の場とトライアル雇用の実施を行いました。



協同した団体

- 奈良市社会福祉協議会
- 奈良教育大学次世代教員養成センター
- 市民生活協同組合ならこープ

地域の概要

全国的に「ひきこもり」の長期化・高齢化が叫ばれる中、奈良市・奈良県においても「ひきこもり」の長期化によって社会経験の機会を失い、再チャレンジすることが困難になっている当事者と苦悩する高齢者ご家族が多くいらっしゃいます。まずご家族への支援を始め、当事者への支援に繋げることが重要です。今回の事業「安心をはぐくむ居場所づくり」は、当事者と当事者家族を社会へと繋ぐ中間的居場所を創ることを目的としています。

他団体と協同することで発見したこと

奈良市社会福祉協議会には各種調整や相談支援を、奈良教育大学次世代教員養成センターには居場所運営の指導を、ならこープにはトライアル雇用経験の場の提供をいただきました。皆それぞれ多忙を極める中での協同ですが、小さな疑問をそのまま放置しておいたりすると意思の疎通がはかれなくなったり、大きな誤解が生じてしまう危険があることを何度か痛感しました。たとえ時間が短くても膝を突き合わせて話すこと、またそのような時間をつくることを心掛ける事が事業の成功の鍵であることを確信しました。

単独の事業では出来なかったことが、協同によって可能となりました。特にならこープの支援により新しい形の当事者それぞれに合わせた就労支援が実現できたことは、今後の大きな希望となりました。

将来イメージ

居場所の回数を増やし、いつでも安心して来られる場の提供を目指します。ひきこもりサポーターのステップアップ研修を継続し研鑽を積むことによって、圧倒的に足りないといわれている訪問支援の担い手を増やしていく事がひきこもり問題の解決にとって重要となってきています。事例を積み重ね実績が認められて、「ひきこもりサポーター」が奈良市の登録となることを目指して邁進したいと考えています。

成果と教訓

成果

居場所については、本年度開始当初当事者2名でのスタートでしたが、徐々に参加者が増え2018年3月時点では、男性4名・女性4名、今後の参加希望者が2名となっています。親の会の参加者も当初2家族でしたが、現在は8家族と増加しました。相談支援についても継続3件、奈良市保護課からの「ひきこもっている保護受給者」の相談が増加傾向で、訪問支援については現在順調に進行しているものが1件で、今後の依頼4件とこちらも増加傾向です。

支援する側の質を高める取り組みとして、「ひきこもりサポーターのステップアップ研修」を全4回実施しましたが、毎回35名中30名程度の出席があり、熱心に研鑽を積み、今後も相談支援・訪問支援の現場での対話による支援（オープンダイアログ）での活躍が期待されています。

教訓

当事者は行きつ戻りつ状態であることを常に念頭においての支援が重要であることが、様々な活動の場面から感じとれました。十分に時間をかけて当事者の声に耳を傾ける、相手の言葉を待つ姿勢が大切で、そこから本人をどのように社会と繋げていけばいいのかを一人一人の状況を考慮しつつ共に試行錯誤することが重要で、支援にはひきこもりの人に対する理解を持つ人の輪を広げる活動も並行して行うことが不可欠であることをより深く理解することが出来ました。

みやけじま 風の家

活動名 | コミュニティー支援活動

活動のきっかけ

2000年に発災した噴火災害からの困難な復興に向かう中、離島という限られた社会資源の中、被災者支援活動に中核的に携わった生活協同組合等の多くの団体と共に、離島した住民自身同士の具体的な支え合いを実現することを目的に設立しました。

活動内容概要

- ・高齢化が進む三宅島においては「高齢者自身も重要な地域人材である」ことを意識して可能な範囲で参加してもらい、協調と協働の時間を重ね、交流を行いました。
- ・世代を超えた交流プログラムを実施(交流おもちゃつき会)
- ・噴火災害を通じて得た貴重な人的関わりを継続し、「生きること」や「くらし」に相互に気づきあえるプログラムを実施(年末おそうじボランティア等)
- ・介護者や地域の方が集い、介護に対する想いを共有しながら互いに気づき励まし合う場として風のカフェを実施
- ・介護予防が求められる中、自治体及び市民協力のもと運動と交流を中心としたプログラムを実施(風の子プログラム)



協同した団体

- 三宅村役場
- 東京都生活協同組合連合会
- 東京災害ボランティアネットワーク

地域の概要

開設以来10年余りを経る中で、地域ニーズも変化しています。開設当初は災害時における被災者同士の交流と共に要援護者(高齢者・障がい者)への支援を意識していました。くらしの再建が徐々に進む中、旧来のコミュニティの再興ではなく「新たなコミュニティの構築」が課題となりました。災害以前の地域コミュニティを基本としながら、より多くの人々が交流する環境が必要との認識を得ています。

他団体と協同することで発見したこと

三宅村役場には介護者支援事業への負担金交付・広報・職員派遣、東京都生活協同組合連合会には島内外事業、研修を目的とした事業などの協同、東京災害ボランティアネットワークには全体的な協同と島内外のコーディネートを担当いただきました。

三宅村自治体をはじめ、地域内の主に福祉・保健・医療の関係機関との連携を密に行うことで、高齢者や障がい者、在宅介護に向き合う方々への必要な情報提供や連携につながりました。

島外の多くのボランティアとの交流事業では、2000年から育まれている島民との関係が深まり、相互にとって元気と勇気を交換できると共に噴火災害からの復興の中での人の歩みについて深く気づくことが出来ました。

将来イメージ

開設時期である2005年から、地域ニーズは大きく変化してきています。過疎・高齢化・人口減少と課題は山積しています。ボランティアと共に、地域に暮らす住民として地域ニーズを的確に捉えたプログラムを展開していきたいと考えています。

成果と教訓

成果

人と人との良い出会いを良い形でとりもち結びつけるためには、そこに集う人々が「出会い」に対して良い期待と希望が感じられる環境やプログラムが必要です。この点において現在実施している各プログラムはとても有効だと思います。

これらの活動を通じて、かつては「被災者」として支援を受ける立場にあった島民自身が、ボランティアとして参加することの意味はとても大きいと感じています。

定期的を実施しているプログラムに参加する島民ボランティアも、かつては10名程度でしたが、行事型のプログラムに参加する島民ボランティアが増え、その総数は現在25名程度となりました。

島民自身の自主的な活動として行うことができました。

教訓

ボランティアという立場を通じて、制度や仕組みでは応じることの出来ない生活上の課題や困難に対して、インフォーマルな部分で積極的に関わることが可能となると認識することができました。地域で生活する生活者であると共に、他者に関与する役割を持つことの重要性を改めて感じています。解決を目指す前に、まずは困難の中にある人にやさしく寄り添うことの大切さを多くの人々と共有することができました。

特定非営利活動法人 きょうどうのわ

活動名 | なんでも相談サロンPartⅢ

活動のきっかけ

当法人が拠点を構える人工島・六甲アイランド（人口18,000人）はまち開きから25年（現在28年）が経ち、定年後世代が目立つようになりました。住環境の良さから若い子育て世代も同時に増えており、多子高齢化しています。住民意識も、「商業施設の誘致などで町のにぎわいを求める」ことから、「助け合いのまちづくり」に転換しつつあります。東灘区全体を見ても、多子高齢の傾向で、新しい地域づくりに踏み出す転換期を迎えています。地域で暮らす人々が、お互いに支え合いつながりあえる、新しい地域活動の在り方を提案しお手伝いしていきたいと考えています。

活動内容概要

最終年度となる今年は、過去2年間で築いたネットワークに加えてさらに参加団体数が増えるなどの広がりをみせました。居場所と他分野専門職団体のつながりをより実効性のあるものにするために、居場所に専門職団体を派遣するコーディネート事業を行い、新しい関係づくりや相談の支援ができました。9月には、「東灘区居場所交流会（なんでも相談サロンスペシャル）」を開催し、77名参加が参加しました。また、前年度から自主活動を始めたチーム本山、チーム住吉の支援も継続し、2チームに新たに13団体が加わり50団体を掲載する「2018年度版歩いて居場所Map 住吉～本山」を作成しました。



協同した団体

- 生活協同組合コープこうべ 第3地区活動本部
- 神戸市東灘区社会福祉協議会

地域の概要

2015年度のなんでも相談サロンでは、東灘区を7地域に分けて、地域ごとに居場所同士、居場所と専門職がつながる、従前の枠組みにとらわれないネットワークの場（くらしの困りごとを出し合う場）を作りました。2016年度は再び7地域で課題の整理を行い、具体的な解決方法を探りました。その中で2つの地域が課題解決の活動に取り組み始めました。「点」でしかなかった居場所が地域で「面」として繋がったことを、マップや通信に「見える化」して伝えていく取り組みです。こうした試作をブラッシュアップして、完成形にし、自主活動の定着まで支援する必要があります。先進2地域を事例として、成果や実践を他地区（東灘区内外）に伝えることも重要と考えています。さらに専門職を実際に居場所に派遣してアウトリーチの機会を作り、せっかくの相談機能を活かしきっていない現状を変えていきたいと思っています。

他団体と協同することで発見したこと

協同団体とは調整会議や合同研修（交流会）などを通じて協同活動を進めました。

「なんでも相談サロンスペシャル」でコープこうべ山口理事長に講演いただきました。「居場所は縁側のようなところ。主客の関係を作らず、人数や出し物も気にせず、利用者に存在承認や役割創造ができる場であればよい。いざというときの為に、相談できる団体と日頃からつながっておくことは大事である」とお話いただきました。生協組合員であるかどうかを問わず、広く地域に向けてのメッセージでした。参加した活動者は「居場所」の存在意義を再確認することができ、勇気づけられました。

将来イメージ

- ①居場所 ②高齢者障がい者など利用者 ③福祉専門職を含む多分野の専門職団体 ④利用者家族など地域住民、という4層が縦横につながって支え合うこと
- 上記の4層を当団体がハブ的につなぐ役割を担うこと
- 「なんでも相談サロン」のような取り組みが他の地域にも波及すること

成果と教訓

成果

- 居場所運営者、専門職ともに参加団体が増えました。
- 「なんでも相談サロン」の参加団体が分野横断的で重層のネットワークとなってきました。
- 参加団体の中でマップ編集委員会ができ、より充実した情報を届けることができました。
- 地域福祉学会近畿大会で3年間の実績を事例報告をしました。

【参加者】

2地域（住吉～本山）でのネットワークの活動：マップ作りに50団体が参加
東灘区居場所全体交流会「なんでも相談サロンスペシャル」：77人参加
居場所応援団コーディネート事業：21件実施

教訓

3年間を通じ当法人は、草の根的に活動してきたサロンやNPOを掘り起こし、面識のなかった居場所活動者同士や多分野の専門職をつなげるコーディネーターの役割を果たしました。ネットワーク作りでは大きな成果を挙げたと考えています。しかし、地域包括ケアを進めるためには居場所運営上の課題が多い事にも気づき、今後取り組むべきことも見えてきました。例えば、利用者家族や地域住民に「地域の中での居場所の役割」について理解を促進していくことなどです。本助成の目指す地域ささえあいに今後も注力していきます。



地域つながりセンター

活動名 | 諸団体・行政と協働ですすめる「安心してすみつづけられる地域づくり」

活動のきっかけ

2008年、松江保健生協と生協しまねが「だれもが安心して住み続けられる地域づくり研修会」を立ちあげ、アンケートの実施や報告会等を地域の諸団体に向けて開催。その報告会に参加いただいた地域の6団体による実行委員会形式で、2011年度から地域ケア連携推進フォーラムを開催してきました。活動の日常的拠点として、2014年「地域つながりセンター」を立ち上げました。

活動内容概要

- あったか地域づくり協議会で進める3つのグループ活動の推進（3活動の自立的進展）
 - 古志原公民館区の住民自身による高齢者包括ケア体制づくり【のべ181名】
他の公民館のモデル的活動となり視察が増えています。
 - 「なないろ食堂」における地域の多世代の居場所づくり【のべ846名】
自立運営へ発展し、ボランティア集団が運営に参画しています。また、「フードバンク準備会」を発足しました。
 - 生きづらさを抱えた若者の働き方、居場所づくり【実参加者15名】
JAや松江市の協力のもと、多くの農家と交流しました。「活動体験」から、「働く場所づくり・さがし」をめざします。
- 出雲地域における協同組合間連携の活動（出雲市社協を含め、8団体連携の広がりへ）
情報交流と協議の場を毎月継続開催しています。2月23日には地域の方に向けた企画を実施し、70名が参加しました。
- 「第1回 全国おたがいさま交流集会」の記録集作成と活用【合同編集委員会9名】
後援を頂いた島根県、県社協、市社協正会員団体等へ贈呈、参加の団体・個人への送付（計100冊）、当センター研修資料として研修来訪者に提供し活用、生協しまねにおいても100冊を関係者に送付するなど活用しました。



他団体と協同することで発見したこと

- ①諸団体が共に連携し活動することで、団体の持つ専門性や特性が活かされること。
- ②横に広がるネットワーク型の諸団体（協同組合等）が連携する活動は、緩やかで多様な参加のある場づくりができること。また、行政や地域の地縁組織とつながることで、地域活動が新たに広がること。
- ③諸団体が、数年間を通じて積極的に協議する関係性を育むことで、事業や活動を継続、発展させることができること。
- ④活動や事業を行う際に多々発生する困りごとを中心にして話し合うことで、活動内容が新しく創られ、団体の枠を超えた「連携」事業・活動となること。

将来イメージ

- ①A▶公民館モデル的活動が他の地域へ広がること
B▶地域の学校・地縁組織と共に運営され、多様な居場所として継続されること
C▶若者への支援体制が市社協や諸団体を中心に目に見えるカタチで組織化されること
- ②出雲地域において、行政も交え考え実践する場ができることを目指したいです。また、出雲市の住民型生活支援サービス団体のあり方への改善と発展的な活動への働きかけに取り組んでいけるとよいと思います。
- ③「おたがいさま」が、各自治会、各地区単位の小さな助け合いのしくみと、相互に連絡し支えあえる関係をめざしたいです。また、応援の登録者が幅広く増えることも期待したいです。



協同した団体

- 島根県農業協同組合
（本店・くにびき地区本部）
- 松江保健生活協同組合
- 生活協同組合しまね
- 島根県社会福祉協議会
- 松江市社会福祉協議会
- ひかわ医療生活協同組合
- 出雲医療生活協同組合
- おたがいさままつえ
- おたがいさいずも
- おたがいさま雲南
- すまいりーねっと
- 古志原公民館

地域の概要

島根県は少子・高齢・過疎および地域コミュニティの弱体化が急速に進行しています。従来の地縁型、血縁型にとどまらない生活支援、公的サービスのネットワークづくりが喫緊の課題です。

成果と教訓

成果

- ①「あったか地域づくり協議会」
A・Bは自立的運営の目的がつき、Cは課題が明確になりました。
- ②「出雲地域の協同組合連携」
月1回の協議を積み重ねて連携も生まれ、共通する課題や自団体のみでは解決しづらい課題なども出しあえるようになり、活動への意欲も高まっています。次年度は、協同組合以外の団体と共にさらに何が出来そうかや、行政や地域に発信できることは何か等、相談しながらチャレンジしていきます。
- ③「第1回全国おたがいさま交流集会」記録集発行と活用
合同で作成した記録集を、立ち上げた世代から次の世代への引継ぎ、他県・他団体の研修資料としても活用しています。

大阪よどがわ市民生活協同組合

活動名 | 吹東・幸ブロック 介護フェア

活動のきっかけ

昨年、地域の状況を地域ケア会議の課題として共有する中、生協を含む地域の団体で実行委員会をつくり、「介護フェア」を開催しました。宣伝チラシの作成を生協が内部印刷で負担しましたが、この助成を使って、枚数、品質ともにアピールできるチラシを作成したいと考えました。

活動内容概要

開催日時 6月17日(土) 10～14時

会場 吹田市吹東町 高齢者いきいの間

内容 福祉用具の展示・説明(生協)、介護保険制度説明(包括)、お口の健康チェックと介護食の試食(歯科医師会他)、栄養相談(済生会吹田病院管理栄養士)

参加者数 アンケート回答者80名、当日スタッフも入れて96名



協同した団体

- 吹田市社会福祉協議会
- 吹三・東地域包括支援センター
- 地区福祉委員会

地域の概要

地域の高齢者は介護保険制度で何が利用できるのか、また、使うためにはどこに相談すればよいのか知らない方が多く、家族に介護が必要な状態になって慌てる事例があります。



他団体と協同することで発見したこと

吹田市社会福祉協議会には実行委員会開催・参加団体の連絡調整を、吹三・東地域包括支援センターには介護保険制度の資料準備と当日の説明を、地区福祉委員会には会場確保・当日の運営・事前宣伝を担っていただきました。

- ①生協の取り組みが地域にはあまり知られていないこと。福祉事業にも取り組んでいることは生協本部の地元でも知られていないこと。
- ②購買生協として物流在庫などの商品を持っていることで、他団体との取り組みに有効に活用でき、また地域の方にも喜んでもらえること。
- ③生協の施設(会議室等)そのものが、地域の資源として活用できること。

将来イメージ

地域の団体で実行委員会を作って今回取り組んだような取り組みをする場合、どうしても取り組みを知らせる宣伝物の製作費が課題となります。地域で高齢者を支える取り組み、コミュニティづくりにつながる取り組みに対して行政の事業として助成制度ができればと考えています。

成果と教訓

成果

- ①参加者数：昨年は50名ほどの参加でしたが、今年は事前の準備、宣伝の取り組みでアンケート回収数で80名、スタッフを入れれば100名近い参加となりました。
- ②地域で生活、活動されている福祉委員さんがスタッフとして多く参加いただき、来年は自分の地域でも開催してみようとの声がありました。
- ③介護フェア後、包括支援センターに参加者が介護のことで相談される事例。中でも地域の福祉委員(民生委員)さんが近所の方の相談に同行される事例など、フェアを通じて介護保険制度を身近に知ってもらうことが出来ました。
- ④生協と他団体との信頼関係が強まりました。特に吹田市社会福祉協議会との関係は、昨年の取り組みや今年の準備の取り組みを通じて、団体として協定を結ぶ関係に発展しました。

教訓

- ①昨年に続き月1回の地域住民を対象とした喫茶サロン形式の食卓会(隣の建屋で開催)と同時開催することで、多くの参加につながりました。今後も食卓会等と合わせて開催することが、参加しやすい取り組みとなると感じました。
- ②他地域の福祉委員さんにも手伝ってもらうことで、開催のイメージを持ってもらうことができました。

京都生活協同組合

活動名 | (地域で) 家の整理・片づけ・不用品処分を学び教え合う会

活動のきっかけ

2016年春より、(京都市) 乾隆(けんりゅう) 地域包括センターの呼びかけで、京都生協、(京都市) 上京区社会福祉協議会・(京都市) 乾隆(けんりゅう) 地域包括センター・住民ボランティアが、公益社団法人京都保健会が運営するサービス付き高齢者住宅「咲くあん上京」の1階集会スペースを無償で提供頂ける事になり、上京区住民の地域作りに役立つことが出来ないか協議を始めました。月1回ペースで協議を重ね、住民に参加を呼び掛けたイベント「健康と地域を語る会」を開催し、住民21名の参加がありました。イベントでは、筋力測定を行い生活の困り事を出し合い、話し合いの中でいくつかの困りごとを解決しました。

この話し合いの中で、多くの困りごとが出され、解決できなかった事が、家の片づけ・整理・処分についてでした。誰にも相談できずにいること・不用品処分が高額請求された例などが具体的に困りごととして挙がりました。

このため、2017年度は、これまでより、一歩進んで、家の片づけ・整理・処分について交流・学習する機会を作る事としました。

実際に住民の方にお聞きしたことを解決に導くことを目的として活動し、一方的な情報提供を行うことを目的とはしていません。

協同した団体

- 京都市上京区社会福祉協議会
- 京都市 乾隆地域包括センター
- ジョイ健活 上京



活動内容概要

社会福祉協議会、地域包括センターと共に、地域の高齢者の居場所作りの活動を行いました。

当初、居場所のコンセプトを「家の整理・片づけ・不用品処分」としていましたが、活動の内容を変更し、近隣住民が参加者として楽しく集まれる居場所作りを行う事、としました。

他団体と協同することで発見したこと

上京区社会福祉協議会からは、ベテラン職員にご参加いただき、地域づくりの視点から運営に関するアドバイスを頂くことができました。具体的には、「一般の参加者が主体的な担い手に成長する手助けを行わないと、生協を含む主催者は永遠に手助けをしなくてははいけない」ことや、「生協を含む主催者が取り組みをやめた場合に継続性が失われる可能性がある」ことについて示唆をいただきました。アドバイスを受けて、担い手作りを検討するようになりました。

将来イメージ

開催場所を増やし、運営の主体は、住民のボランティアが行っていくようにしたいです。生協及び各種団体は、協力はするが、主催者ではなくても運営できるように移行していきたいと考えています。

成果と教訓

成果

4月～8月の5回は、講師を招いての講演会中心の集まりで、平均26名が参加しました。

9月～3月の7回は、参加者の手づくりイベントを中心とし、参加者が主体に考えた企画を行いました。その結果、7回の平均で25名が参加し、人集めのイベントをしなくても常に20名以上に参加して頂けるようになりました。

更に、2018年2月からは、二か所目の居場所作りをする事になりました。これまでの参加団体に加えて、新たに京都市の「成逸」と「小川」の2つの地域包括センター、京都市の地域リハビリ支援センター、京都市予防推進センター、京都市保健センターの協力を頂いて開催しました。健康測定と参加者同士の交流を行い、40名の参加がありました。参加者が多くても、これまでの経験で混乱なく、参加者の方は満足して帰られた様子でした。

教訓

「主催者が、参加者に対して、場を提供する」という考え方をやめなければ、参加者はお客さん扱いが当然と考え、いつまで経っても参加者による運営は出来ない事がわかりました。

また、主催者が先回りをして考えるのではなく、参加者の意見をその場で聞いて、参加者に合わせて変えていくことが参加者の満足につながる事もわかりました。

特定非営利活動法人 キッズドア

活動名 | コープみらいプラザを活用した低所得の子どもたち向けの通年型無料学習会の実施

活動のきっかけ

ひとり親家庭、兄弟が多い、低所得など様々な理由で経済的に厳しく塾に通えず、学力の不安を抱える小中学生を対象に、学習サポートを行う取り組みです。大学生や社会人のボランティアが無料で勉強を教えることで、子どもたちの学習面でのつまづきを解消し、学習習慣の定着、学力の向上、高校受験のサポートを行います。

また、地域社会で孤立しがちで、社会体験の少ない子どもたちが、学習会で様々な年齢の大人と子どもに接することで、コミュニケーション能力やソーシャルスキルの獲得をめざします。

さらに、学習会で「できた!」という小さな成功体験を重ねることで、自己肯定感を向上し、社会に出る力を身に着けさせます。

活動内容概要

- ・場所：コープみらいプラザ新中野 会議室等
- ・対象：低所得層及びひとり親家庭の小学4年生～中学3年生 延べ310名
- ・内容：学習支援と体験イベントの開催
(月2回程度、土曜日14:00～16:00)
- ・方法：キッズドア、中野区社協、コープみらいブロック委員などを通じて募集した学習支援ボランティアによる指導

協同した団体

- 生活協同組合コープみらい ●中野よもぎ塾
- 子どもほっとネット in なかの

地域の概要

日本では子育てや教育にお金がかかり、特に都心部では塾などの有料の教育サービスを受ける方が多く、保護者の所得の高低が子どもの学力に比例する「教育格差」が起きています。

日本の子どもの貧困率は16.3%で、およそ6人に1人が貧困状況にあり、大きな社会問題となっています。特にひとり親家庭の貧困率は54.6%と、他の先進国と比べても突出しています。母子家庭のほとんどは就労していますが、家事・育児などの理由で正社員になることが難しく、パートを掛け持ちするなど長時間労働をしても低い収入です。そのため教育に投資することができず、子どもの勉強を見る時間ありません。その結果、学校の勉強につまずいてしまった子どもは、どんどん学力が低下し、高校受験などで不利益を被っています。

他団体と協同することで発見したこと

コープみらいのご協力で、会場の確保が安定してでき、子どもたちの安心感につながっています。ブロック委員さんのご協力で、学習会以外のイベントも実施できています。

「こどもほっとネット in なかの」に参加して地元の団体と情報交換ができ、活動の幅を広げることができました。また、無料塾中野よもぎ塾様と共同して受験生の作文・面接指導をしました。普段とは違う人の中で実施でき、本番に近い緊張感を持って行うことができました。

将来イメージ

本事業をモデル事業として、各地のコープみらいの店舗内にある会議室をお借りして、低所得層の家庭の子どもたちを対象とした学習会を開催したいです。各地域で開催することで、学習サポートに加え、子どもたちがなにか困った際の、拠り所となることができそうです。また、地域全体で子どもたちを見守る体制作りに貢献できると考えています。



成果と教訓

成果

<みらい塾実施成果概要>

- 登録児童、生徒数：35名
- 活動参加児童生徒数：延べ310名
- 参加児童、生徒出席率：約55%
- 受験生志望校合格者数：7名(100%)
- 活動参加ボランティア数：延べ337名
- 活動回数：25回

<終了時アンケートより>

▷子どもたちからの声

- 勉強だけではなく、先生と話したり、相談もできた。(中1、女子)
- 楽しく勉強ができて、来るのが楽しみになりました。(小5、男子)

▷保護者からの声

- マンツーマンで教えてもらえるのがいいです。分からなかった算数も教えてもらって『やっと理解出来た』と喜んでいました。
- ひとり親の生活が始まり、学習や普段の生活などいろいろな場面で不安を抱えておりました。こちらでたくさんの暖かい方々に触れ合っただき、子どもたちも明るく前向きになったように思います。ライフワークの一つとして今後も続けていきたいと思っています。

教訓

ブロック委員さんには、イベント・企画でご協力いただき、活動への理解を深めていただいています。ブロック委員会のイベントで子どもの貧困をテーマにした映画会が行われた際は、会場でブロック委員さんが自発的にみらい塾への募金活動をしてくださいました。とてもありがたく、もう少しコープみらいと密に連絡を取り合い、事前にその企画に関われればよかったと感じました。



生活協同組合コープあおもり

活動名 | 福島の子ども保養プロジェクト コープあおもり in ねぶたツアー

活動のきっかけ

被災地を支援したいという組合員の願いを形にする取り組みとして、日本生協連の方針を受けとめ、福島の子どもたちが思いっきり外遊びできる場を作りたいと考えました。27年間参加し続けてきたねぶたの意味や価値を再確認できる機会とたく、企画しました。

協同した団体

- 青森中央学院大学
- 青森保健生活協同組合
- 福島県生活協同組合連合会

活動内容概要

福島の親子を青森にお招きし、コープあおもりが運行しているねぶたに跳人として参加していただきました。2日目は、自然豊かな梵珠の森で親子ともに思いきり体を動かして遊び、また、松ぼっくりやどんぐりを使ってストラップなどを作り、青森での思い出としていただきました。



他団体と協同することで発見したこと

青森中央学院大学にはボランティアの選出を、青森医療生協には看護師の派遣を、福島県生協連には募集および推薦を、それぞれ担っていただきました。

学生たちは子どもたちに気を配り、楽しんでもらうことを心がけていました。子どもたちも学生になじみ、保護者の方々も安心して見守っていました。

将来イメージ

2018年度からは、青森県民生協とも協同して企画運営をしていくこととなりました。今後、福島の子ども保養プロジェクトを更に多くの人に理解していただくことで、ねぶたまつり以外の企画が検討できると思います。

学生ボランティアからも、次年も参加したいとの声もあり、多くの学生が参加し、福島を忘れない取り組みになっていければ良いと考えています。

成果と教訓

成果

- 宿泊場所の部屋数の関係上、参加者家族は減ったものの(16年14家族、17年8家族)親子で楽しむ姿があらこちらで見られました。
- 事前に「アレルギーチェック」を提出していただいたことで、昼食などの手配段階で対応ができました。
- 協同している大学の実習と重なったため、急遽専門学校にボランティアを依頼し、理解を得て次年度より協同していくこととなりました。(ボランティア5名)

教訓

- 全員で現地見をするので、スケジュールの見直しができ、当日のイレギュラー対応まで全員で確認することができました。
- 学年と学科により学習と重なる場合があるので、複数校にボランティアの打診することが必要であることがわかりました。

特定非営利活動法人 しんせい

活動名 | 被災弱者を包み支え合うコミュニティづくり

活動のきっかけ

東日本大震災において多大な被害を被った障がい者などが、平和で安心した生活が送れるよう支援活動を行い、明るく平和な福島を創造していくことを目的として団体を設立しました。

活動内容概要

1. 被災者の孤立を和らげ、前向きな気持ちを届ける訪問活動
避難弱者の孤立を軽減するため、コープふくしまや民間支援団体と一緒に、仮設住宅や復興公営住宅を訪ねました。地域住民と避難障がい者の会話の機会をつくり、孤立や排除がない包摂的なコミュニティづくりを目指しました。なお、障がい者のつくる福祉授産製品も一緒に届け、障がい者の仕事についての啓蒙啓発活動も行いました。
2. 自立した暮らしを営むための障がい者を対象とした研修会の実施
帰還した障がい者や避難先に留まる障がい者等も安心安全な暮らしを営むことが出来るよう、必要な情報や知識をわかりやすい言葉で伝え、今後の暮らしに対する不安を取り除くための研修を行いました。
3. 障がい者の専門的な技術を学ぶ機会をつくる活動
専門家にアドバイザーを依頼し、障がい者と職員が技術指導を受け、園芸事業をスタートさせました。



協同した団体

- 生活協同組合コープふくしま
- 認定NPO法人 AAR 難民を助ける会
- ふくしま園芸作業療法研究会

地域の概要

震災から6年が経ち、震災・原発事故も風化していく中で、取り残されてしまいそうな弱者の姿が目立ち始めています。福島では避難者の故郷への帰還政策が加速していますが、利用できる福祉サービスがないことなどから帰還する障がい者は少なく、困難を抱えながらも避難先に留まる方が多いです。公的な避難者支援も打ち切れ、民間の支援も撤退、仮設の自治会も解散する中、入居者がまばらとなった仮設住宅等の孤立は深刻です。一方で、故郷へ帰還した福祉事業所なども少ない人数で活動が続けていますが、孤立を防ぐため人と人がつながる仕組みづくりが欲しいという声が高まっています。



他団体と協同することで発見したこと

コープふくしまには被災者への支援活動の協同を、認定NPO法人 AAR 難民を助ける会には被災弱者支援の啓蒙啓発サポートを、ふくしま園芸作業療法研究会には園芸作業サポートとワークショップを、それぞれ担っていただきました。

コープふくしまによる炊き出し等は住民（婦人部）の参加が多く、いきいきと活躍されていました。住民の「出番と役割」をつくる支援はたいへん勉強となりました。また、それぞれの団体の得意を活かすことで、多くの避難者が参加しやすい活動を行うことができました。具体的には、社会福祉協議会による住民への会の周知や広報などの協力が、開催を広く住民に伝えることができました。

将来イメージ

「病院がない」「福祉事業所がない」「車が運転できず、孤立する」などの理由から、故郷に帰ることが難しい避難弱者の孤立はますます深刻なものとなっています。彼らを支援する団体とパートナーシップを組みながら、今後も身の丈にあった支援活動を継続していきたいと思えます。

成果と教訓

成果

- ①支援団体の協働が生まれ、次年度の訪問活動継続が決まりました。

コープふくしま、各町村の社会福祉協議会、郡山市園芸療法研究会が力を合わせて訪問活動を行ったことにより、新しい協働が生まれました。「この活動を機に避難者支援に関わることが出来て嬉しい」という郡山市民からの声もきかれました。恵下越災害公営住宅の交流は42名からスタートして徐々に参加者が増え、2月には64名の住民が参加しました。

- ②障がいに対する理解が進みました。

訪問活動に参加する住民から、「これまで障がい者と接する機会がなかったけれど、お菓子を作ったり、花の手入れをする仕事をしているのですね」と声をかけて頂く機会が多くありました。聴覚障がいを持つ利用者のために、筆談用のノートを集会所に設置するなど、住民の理解が大きく進みました。そのことは、同じ復興住宅に住む障がい者の安心な暮らしとなり、孤立の軽減にもつながっています。

教訓

本助成事業により、住民参加のワークショップなどを行うことができたが、来年度以降、このような支援を続けていくことは難しい状況です。しかしながら、今後はますます民間の支援も遠のき、弱い立場の人が孤立しがちになることが予想されます。支援団体が力を合わせ、自分たちの力量に合った持続可能な訪問活動を続けていくことが必要であることがよく理解できました。

ろっこう医療生活協同組合

活動名

神戸の名産のイカナゴのくぎ煮を組合員の手で作り、東北の被災地に持参し、被災者に手渡す。併せて話を傾聴する

活動のきっかけ

東日本大震災の発災から6年経ち、次第に被災地以外では風化傾向が著しい状況です。しかし、被災地ではまだ仮設住宅住まいの人びとも少なくなく、住まいを含む生活の再建は困難です。特に高齢者は「取り残された感」も強く、精神的なささえ、傾聴活動が求められています。22年前に阪神淡路大震災での経験と同様の課題が多く、その経験を踏まえたアプローチは有益と考えました。

活動内容概要

2017年8月に、現地へ先遣隊を送り、仮設住宅や行政との打ち合わせ、交流を実施しました。

2017年10月に、「さんま祭り」を開催し、収益金と支援募金を集めました。

2018年3月、いかなごのくぎ煮を作りパック詰めして、それを25日から27日にかけて、3団体へ、4名が空路（大阪伊丹空港～仙台空港）被災地の岩手県大船渡市へ持参し、現地に残る仮設住宅に暮らす被災者の方々にお配りしました。こうした行動を通して、被災者の方々の体験やお気持ちをお聞きし懇談を深めました。その中で、「特に仮設住宅から新しい住居へ移った際の『人と人とのつながり』がこれからさらに大切だ」との話はとても印象に残りました。また集めた募金219,461円を大船渡市長に手渡しました。

協同した団体

- 特定非営利活動法人 花たば
- こうべ保健サービス



他団体と協同することで発見したこと

高齢者共同住宅を運営するNPO法人花たばは、高齢者のための食事用意を日頃から実施しているため、いかなごのくぎ煮作りを一手に担うことができました。

将来イメージ

仮設住宅が解消され、復興公営住宅に移り住む方々を対象とした支援活動の取り組みを、現地の市職員や支援員の皆さんと企画していきたいと考えています。

成果と教訓

成果

2ヶ所の仮設住宅を訪問し、10名の住民と交流して、仮設住宅の統廃合による新たなコミュニティづくりに貢献できました。

大船渡市長や保健介護センターなどの市職員、仮設住宅の支援員の皆さんと直接意見交換ができ、今後も被災地支援を続けていくことの重要性を確認できました。

教訓

3団体のそれぞれの特徴を生かすことができました。

毎年恒例となった、いかなごを届ける取り組みは、いかなごを通して、現地の被災者との交流が深まり、更に、行政との情報交換が進みました。

先遣隊を派遣することで、仮設住宅の居住者の状況や仮設住宅が減少していくこと、住民による主体的な健康づくりの課題などの情報を得ることができ、3月のいかなご届け隊の時の行動に役立てることができました。

テーマ

2

命を守り、
その人らしい生き方が
できるようにする



生活協同組合おおさかパルコープ 鶴見福祉センター運営委員会

活動名 | 鶴見福祉センター開設5周年を記念し、地域にさらに広げ必要とされるたまり場づくり

活動のきっかけ

13町会・ヘルスコープおおさかと共同で、2階での昼食会・学習会などの開催ができ、少しずつセンターが地域に広がってきています。サロンの開催は町会女性部もスタッフとして加わり毎水曜日に開催しています。この場はお互いを支え合える場であり、人間関係を培う場となっています。5周年を機に、さらに地域住民のニーズに合ったセンターとし、また、高齢化が進む中で高齢者の孤立を防ぎ、なによりも信頼され、必要とされ、安心して住み続けたいまちづくりを目指したいと考えました。

活動内容概要

福祉センターで集う人々の交流から繋がりを深め、地域住民に必要とされ、気軽に楽しめる“たまり場”づくりを進めました。

- ・大型バスを利用して、人と防災未来センター・フラワーパークへ出かけ、学習・見学、交流の場を企画しました。(参加 83名)
- ・福祉センター5周年祭を開催しました。多くの地域住民に福祉センターを知ってもらう機会となりました。(来場 430名)
- ・コープこうべ みなくる そのだを訪問、拠点の目的や設立までの経過を学びました。



協同した団体

- 榎本地域活動協議会 13町会
- 生活協同組合ヘルスコープ
おおさか

他団体と協同することで発見したこと

町会、ヘルスコープと協同する事で日頃のお付き合いの中から、地域の方々の楽しみ方や、困りごとなどを知りそれぞれの組織や地域の特色、得意な所を生かしながらセンターを知って頂く・利用して頂く機会をつくり、少しずつ地域の方々の参加を得ることが出来ました。

将来イメージ

老若男女の多くの方が、一人ぼっちにならないで楽しく集える、来て良かったと思える、ほっこり出来る、元気になれる“たまり場”づくりを目指します。

- 高齢者向けの楽しく健康づくりに繋がる場、また、子育てママのほっと出来る場づくりも進めていきたいです。
- 年に数回、皆でわいわい楽しいお食事会が出来ればと思っています。
- サロンは現在毎週2回水・木曜日に開催していますが、一日でも多く開催出来ればと願っています。
- 企画や運営についても、地域住民が自主的に気軽に利用して頂ける仕組みを作っていければと考えています。
- たまり場の目的に賛同頂ける地域のグループやNPOとの連携を考えていきたいです。

成果と教訓

成果

- 福祉センターを利用されている地域住民が多く参加された「人と防災未来センター」見学会は、防災・減災を考え、自助・共助に繋がる機会となりました。(83名参加)
- フラワーパークでのバーベキューでの昼食やバスの中では異年齢間の交流が出来ました。
- 5周年祭では午前中は子ども向け、午後は高齢者向けと地域の年齢層に合った催しを企画し多くの参加を頂きました。又、近隣中学校の吹奏楽部による演奏は盛大にフィナーレを演出してくれました。広く多くの地域住民にセンターを知って頂く最大の機会となりました。(430名参加)
- たまり場の定着を考え、囲碁・将棋を揃えた所へ、健康麻雀をやりたいとの要望があり実施しました。麻雀にひかれてか、新たな顔ぶれが増え、サロン開催も水・木曜日の毎週2回に広げることができました。

教訓

- 町会、ヘルスコープと運営委員会を共に持つ中で、お互いが地域を知り理解を深め協同の意識を持てるように進めていますが、それぞれの活動が活発で時間調整などが難しく、サロン開催時に細やかな意見調整を行っています。
- 5周年祭の近隣中学生による吹奏楽の演奏時には、またたく間に人垣が出来ました。やはり地域の方々が集まってこそ地域に開放されたセンターといえるのだという思いを再認識することが出来ました。

一般社団法人 WiTHs

活動名 | 多世代で知る・実践する健康教室

活動のきっかけ

近年、女性の健康問題を取り扱う情報やサービスは散見されますが、根拠に乏しいものも多く、逆に健康問題を発生させている事例もあります。そこで子育て世代が多い東灘区に在住する理学療法士が、地元の活性化も視野に「全ての年代の全ての女性が、自分が暮らす地域で生涯を通じて健康で自分らしい生活を送るために、専門的な知識と技術と経験をもとに理学療法士が中心となり、医学的かつ社会的に包括的な支援を行うこと」を設立理念として団体を設立しました。

活動内容概要

昨年度の活動を経て、今年度は腰痛予防についてシリーズ化し、3回講座での継続開催をしました。シリーズ化したことにより、参加者の定着を図り、また講座を受講しての変化を確認することを目的としました。また、単発でも参加しやすいように、週末に2回単発の講座を行いました。単発講座では「骨の健康と姿勢」、「足指から始める転倒予防」の2テーマを扱いました。いずれの講座も定員を大幅に上回る申し込みがあり、のべ113名の参加者を迎えることができました。

託児を設置し、子ども連れでも来られる環境設定を行い、高齢者と子育て世代が共に学ぶ場をつくることができました。



協同した団体

●生活協同組合コープこうべ
福祉介護事業部

地域の概要

活動拠点である神戸市東灘区は出生数が市内で最も多い地域であり、子育て世代が多く暮らしています。その一方で地域によっては高齢化率が40%を超えており、いわゆる「多子高齢化」の様相を呈しています。我々は2016年度に本助成を受け、健康増進を目的とした産前産後の女性を中心とした多世代交流事業を展開しましたが、活動を通して産前産後世代と高齢者世代それぞれが抱える健康に関する課題への関心が高いことが伺えました。一方で両世代の抱える課題の共通項もみられ、2017年度は改めて、多世代が共に学ぶ健康教室を展開しました。

他団体と協同することで発見したこと

今回も協同することにより、参加者が置かれている現状やニーズを把握することができました。特に昨年度同様、コープこうべを通じての広報効果は非常に高く、信頼性の高さで継続できたと感じています。会場の提供や広報など、非常に親身になっていただき、ともに活動することで、市民に対し、いいものが届けられることができたと考えています。講座についても概ね好評であり、今後の継続を望む声も多く聞かれました。

将来イメージ

医療制度や介護保険制度がかなり逼迫した日本において、介護予防や健康増進は非常に大きな役割を持つ、と考えています。今後もこのような講座を市民向けに開催していきたいです。

その一方で、これが単なる社会貢献にならず、ある程度の事業化できることも目指していきたいと考えています。

成果と教訓

成果

今回全ての講座定員を上回る応募をいただき、集客が安定して行なったことは非常に大きな成果でした。腰痛予防のシリーズ講座には23名、骨の健康と姿勢の講座には27名、足指から始める転倒予防には17名の参加者がありました。昨年度の活動が基盤になり、参加者層が広がったと考えています。

神戸市東灘区内からだけでなく、宝塚や垂水といった他地域からの参加もありました。これは健康支援に関する関心が幅広い年齢層にあり、本企画のような講座が求められている、という現状を示していると考えられます。

教訓

講座内容の設定について、テーマに関心がある方が多く集まってくれたことは非常に我々としても喜ばしいことでした。しかしながら限られた時間内での情報提供としてはやや情報量が多かったのではないかと教訓を得ました。その点についてはシリーズ化することにより、昨年度から大きく改善できたと感じています。社会貢献として非常に大きな収穫を得た一方で有料化が難しい、という現状を把握することもできました。

非営利公益市民活動団体 コミュニティマーガレット

活動名 | ノルディックウォーキングプロジェクト2017

活動のきっかけ

いつまでも住み慣れた地域で過ごせるよう、高齢化による虚弱や廃用性症候群をはじめ病気になる人自体を減らす“健康の増進”が必要です。そのためには、地域で室内外の運動とさまざまな文化活動に取り組めるコミュニティ作りが求められます。また、理学療法士と地域住民協働でリハビリテーション的な視点での運動への取り組みや、専門的な介護予防や成人病の予防を含めた健康づくりが必要とされています。

多世代交流を兼ねた運動習慣をつけることで、地域が活性化し、自助・相互の支え合いが広がる優しい地域コミュニティを作り、地域全体を元気にすることを目的に活動を開始しました。地域住民の生きがい活躍の場を作り、いつまでも元気に住むことの出来る環境を整えたいと考えています。

活動内容概要

地域での定期的なノルディックウォーキング活動と体操や健康イベントを開催しました。

週1回のノルディックウォーキング活動では、住民ボランティアのインストラクター養成を行い、市内外に活動範囲を拡大しました。ロコモティブシンドロームや生活習慣病の予防を目的に運動指導を行い、健康づくりの普及・啓発活動を実施しました。

当団体の運動教室でもノルディック運動を取り入れて、ロコモティブシンドローム予防と啓発を推進しました。ボランティアを含め、ノルディックでの健康づくりを通じた多世代交流から、地域包括ケアシステムの実践を図りました。

協同した団体

- ネット五條
- 奈良県医療福祉生活協同組合
南和委員会

地域の概要

五条市の運動習慣のある方の割合は男性39市町村最下位・女性30位と、運動習慣の普及が急務です。

他団体と協同することで発見したこと

- ① ネット五條・奈良県医療福祉生活協同組合様との協働では、食や健康に対する興味のある方へ、健康づくりの実践とロコモティブシンドローム等の予防啓発を推進出来ました。
- ② 健康づくりの輪をさらに広げ、互いに協力して活動を楽しめました。
- ③ 当団体のボランティア活動を協働団体と行うことで、医療生協やネット五條の活動も周知することが出来、お互いの活動を知ることが出来ました。
- ④ 生協との協働ではノルディックでの街並み散策を企画し、他の地域の歴史文化を知ることができ、活動者同士の交流を楽しみながら歩行運動と地域学習が行えました。

将来イメージ

- 当団体の運動教室や各種イベント・出張教室では住民がボランティアとなり多世代での健康づくりに寄りたいと思います。
- ノルディックウォーキング活動を一つのツールとして継続し、健康づくり普及活動の輪を広げて元気な地域になることを目指します。
- 住民主体の健康づくりに取り組み、様々な方のアドバイスを頂きながら地域包括ケアシステムの中の一環として地域のお役に立てればと考えます。
- 活動が『参加してよかった』と言っていただける様な健康づくりと仲間づくりの憩いの場に発展できることを目指します。

成果と教訓

成果

- ① 多世代が楽しく取り込むことの出来る健康づくりの支援を実現しました。
- ② ノルディックインストラクターと理学療法士の指導により、運動方法や歩行活動の重要性の理解を促せました。
- ③ 市内外での活動場所を増やしたことで広い地域での健康づくりの実践が行えました。
- ④ 当団体主催の健康づくりイベントや、地域コミュニティ単位での健康づくりを行うことで、楽しいノルディックウォーキング活動と地域コミュニティの活性化の推進が出来ました。
- ⑤ 生協団体と協働した活動では健康づくりを地域全体に広げるきっかけ作りとともに、お互いの活動を知り、交流の広がりを持てました。
- ⑥ 当団体活動では、住民主体での活動を推進することで、地域包括ケアシステムに向けたボランティアの役割を果たすことが出来ました。

教訓

- ① ノルディック活動による健康づくりを通して健康寿命の向上・ロコモ予防の大切さを伝え、実践を行うことが重要であると考えています。
- ② 住民と協働団体との活動での健康意識の広がりやコミュニティでの活動は、将来的にたすけあいの活動に発展するためにも重要であり、地道な楽しい活動と継続が重要です。
- ③ 健康づくりの効果を住民に示し理解を得ることが大切で、かつ活動者自身が意欲的に楽しく取り組むことが出来る憩いの場づくりが重要であると感じています。
- ④ 広報媒体や方法には課題があり、活動を的確に伝えて活動者を増やし、住民の自主的な活動に繋げることが必要であると実感しています。
- ⑤ 今後も活動を継続する為に、今後もボランティア団体活動を盛り上げ、地域の方の協力を得ていくことも課題です。



フードバンクちば

活動名 | いのちをつなごう～フードバンクちば・生活協同組合連携キャンペーン

活動のきっかけ

2010年にフードバンクの勉強会に参加し、千葉県にフードバンクがないことを知り設立を企画。他団体とともに準備をすすめ、農水省の助成金などを受けて研修や先行するフードバンク団体の視察などを行い、2012年に設立しました。当初より、生活困窮者の就労支援の場として位置付けています。

活動内容概要

- ・2017年9月～11月に、県内の4生協および県生協連とフードバンクちばが連携し、市民(組合員)に呼びかけて余剰食品を集める活動(フードドライブ)を行いました。
- ・キャンペーンの共通ロゴを作成し、共通チラシ・ポスターや各生協のチラシなどで広報を行いました。
- ・キックオフ・イベントで映画『0円キッチン』の上映会等を行い、食品ロスの問題に関心を持っていただくと共に、生協と連携したフードドライブの認知度を高めました。
- ・集まった食品は、各市役所や社会福祉協議会・生活困窮者自立支援窓口等を通じて、困窮する世帯への緊急一時支援食品として活用しました。
- ・今年度の連携キャンペーンの実践を通じて、千葉県内での生協とフードバンクによる食のセーフティネットの持続的な発展の可能性を検討しました。



協同した団体

- 生活クラブ生活協同組合(千葉)
- なのはな生活協同組合
- 生活協同組合パルシステム千葉
- 生活協同組合コープみらい
- 千葉県生活協同組合連合会

地域の概要

農水省の推計によると、日本では年間632万トンの食品ロスが発生しており、その約半分は家庭から出るものと言われています。一方で、少子高齢化、こどもの貧困の拡大などが社会問題化する中で、生活困窮者自立支援法が施行され、生活に困窮する人の支援が本格的に始まっています。県内の生活協同組合とフードバンクちばが連携することにより、食品ロスや貧困の問題を多くの市民に伝え、千葉県内の食のセーフティネットづくりを進めていきたいと考えています。また、併せて、困難を抱えた生活困窮者等の社会参加・活動の場を広げます。

他団体と協同することで発見したこと

フードバンク活動は市民、事業者、行政が連携して行う事業ですが、生活協同組合が市民活動として、そして事業者としてこの活動に取り組むことで、食品ロス削減や生活困窮者支援の問題について、より幅広く啓発できる可能性を感じました。

県内4生協と県生協連が連携したことで、今後は他の協同組合セクターへ働きかけることもできるように思います。

将来イメージ

初年度(2017年度)の取り組みで、フードドライブについては一定の認知が得られたと思いますが、継続して行うことが必要です。年に1度、県内共通キャンペーンとして行うことと、各生協ではそれ以外の時期に独自の取り組みとしてフードドライブを行っていただくことで、食品ロス削減と貧困問題への貢献に、より効果が見込めます。

成果と教訓

成果

- キックオフ・イベントでは、午前・午後の2回の企画に、161名の市民(組合員)が参加し、食品67.3kgを持ち寄りました。また、セレモニーやフードバンクの説明、映画上映などを通じた企画全体への感想では、「Q. フードバンクの取り組み(食品ロス削減、困窮世帯支援)についてはどのようにお考えですか? 複数回答」に対し、「①フードバンクの活動に関心を持った(71人 60.6%) ②家庭での食品ロス削減に取り組みたい(99人 84.6%) ③よい活動なのでサポート会員として支援したい(6人 5.1%) ④機会があれば食品を寄付したい(71人 60.6%) ⑤フードバンクちばのボランティアに参加したい(9人 7.6%) ⑥生協を通じて協力したい(81人 69.2%) ⑦特に関心はない(0人)」という回答があり、食品ロス削減とフードバンク活動の啓発という目的が達成できました。
- フードドライブキャンペーンでは、各生協が熱心に取り組む、キックオフ・イベントも含め、約2.3トンの食品を集めることができました。

教訓

生協の組合員からは、おおむねキャンペーンについてよい評価をいただきましたが、まとめの会議では、「キックオフ・イベントはもっと参加型にしてほしい」との要望もあり、組合員が参加しやすい、参加したくなるイベントを企画することも考えたいと思います。

きらくクラブ

活動名 | みんなで作ろう! 私たちの居場所「きらくクラブ」

活動のきっかけ

気楽に誰でも立ち寄れる「きらくクラブ」という憩いの場を提供していきたいと考えます。参加者とスタッフお互いにとっての、生きがい作り、学びの場を目指します。また子どもや障がい者なども自然に交流できる場でもありたいと思います。また生協さんと協力し、生活に密着した「安心と豊かな生活」をテーマに活動したいと願い今に至ります。

活動内容概要

- ①週3回の憩いの場 月・水・金 10時～15時
- ②「きらくマルシェ」：第3水曜日
- ③「きらくクラブ」分家として・ガーデンカフェ、えんがわカフェをスタッフ自宅で開催
- ④「はじめての麻雀」「I love キルト」(地域の方によるボランティアでの講師)
- ⑤子ども食堂(Confeito)月1回 第4土曜日 12時～14時
- ⑥「男の定食や」を開始(男性の孤食対策、居場所づくり)
- ⑦月1回 料金100円「つくって食べよう」(高齢者の孤食対策)
- ⑧講座開催・消費者生活センター、英会話、防犯課(振り込み詐欺対策)
- ⑨きらくカルチャー(地域講師による文化的な活動)
- ⑩相模原市住民主体体操(B型)：住民主体のミニデイサービス(百歳体操+交流)
- ⑪普通救命講習(相模原市防災協会)スタッフ10名受講
- ⑫コープフードロスの受け取り(月2回受け取り。1人住まいの男性の居場所づくりとしてスタッフと一緒に毎回参加)
- ⑬きらく会議 月1回 活動の確認と振り返り。(その他必要に応じて開催)
- ⑭社協福祉祭(小山ふれあいまつり)に協力。
- ⑮「クールシェア」の場所の提供をする(7月～9月)
- ⑯地域交流会(保育園児との敬老会)元幼稚園教諭による人形劇、ペープサート

協同した団体

- 生活協同組合ユーコープ
かながわ たすけあいネットワーク

地域の概要

高齢者はますます増加していき、頼みの綱の介護保険も医療保険も逼迫する状況であると聞きます。また相模原駅周辺はマンションが多く、地方または都心から住み慣れた自宅を売却し移り住む方が多いようです。そのためか閉じこもりがちなる方も多く、廃用症候群になる方も少なくありません。



他団体と協同することで発見したこと

ユーコープには、食料提供、ボランティアの紹介、終活に関する講師派遣などを担っていただきました。

相模原市の補助金、地域ささえあい助成金の活用により活動を継続してきて、子どもから高齢者までの幅広い層について目を向けることが出来るようになりました。またユーコープの食料提供を、地域包括支援センターの職員を通して貧困生活をしている方にお渡しすることができました。「きらくクラブ」の活動でも、食材が提供されたことで子ども・高齢者とも安全・安心に食することが出来ました。

将来イメージ

高齢者はもちろんのこと、赤ちゃんを連れてお母さん、体が不安な方、誰もがくつろげる共生社会を目指しています。誰もが「きらくがあって良かった」「今日は、話を聞いてもらえてうれしかった」「〇〇さんと会えておしゃべりできた」と思える場所にしていきたいです。様々な機関の方と交流を持ちアドバイスをいただきながら地域に根ざし、地域のお役に立てればと考えています。

成果と教訓

成果

光熱水費を捻出するため、参加費を200円頂くようになりましたが、その後、コープさん、自治会、応援者、またスタッフからの提供や援助、4月からの相模原市による助成金、スタッフの広報の努力などにより、今年度より参加費を100円にする事が出来ました。

- マルシェ10回 平均50人
- 子ども食堂12回(子どもの人数のみ) 平均15人
- きらくカルチャー 8回 平均34人
- つくって食べよう12回 平均10人
- イベント2回 平均110人

「きらくマルシェ」の来場者が増え、「きらく食堂」も毎回楽しみにしてくださる方がいます。「子ども食堂」では赤ちゃんを連れて若いママさんたちも参加され、小学生と交流しました。「きらく分家」を2カ所立ち上げ、ひとりでも多くの方の居場所になれるように考えています。

教訓

立場が違う団体との交流により、考える幅を広げることが出来ます。「きらくクラブ」のスタッフは、様々な団体でも活動しており、お互いに刺激を受けながら活動を進めています。

東京西部保健生活協同組合

活動名 | 東京に、どんぐりから育てて、常緑樹のいのちの森をつくろう！

活動内容概要

- ◎一昨年より保坂世田谷区長に相談し、昨年7月15日にシンポジウム「東京に、どんぐりから木を植えて森をつくろう」を世田谷区の後援と区長挨拶を得て、世田谷区役所プライトホールで開催し、100人を超す参加がありました。防火・防災、環境保全、高齢男性の孤立防止の3つの視点からとりくみに意義があることと、23区にどんぐりを植え、育てることの意義を確認しました。
- ・11月19日にはどんぐり拾いおよび自然観察のイベントを世田谷等々力溪谷公園で開催し、40名あまりが参加し、自然観察と植え付けの実習指導を受けました。
 - ・12月15日にはさいたま市浦和で木を植え、育てる意義について学習会を開催しました。参加者は15名でした。
 - ・3月11日に「フォーラム東京の森づくり 森と暮らすまちづくり」を開催し、50名の参加がありました。今回のフォーラムでは、東京のまちなかで木を育て、みどりを増やす活動、事例を紹介し、その喜び、意義、課題について交流することを目指し、目標を達成することができました。国立市のとりくみから路地庭づくりは23区に住民自身の意志で、手で、森をつくるとりくみの出発点となり、防災にも、コミュニティづくり、福祉にもつながることもわかりました。23区での森づくりの入口を見つけることができました。



協同した団体

- ◎世田谷区
- ◎NPO 建築ネットワークセンター
- ◎NPO 森びとプロジェクト委員会

地域の概要

1. 世田谷区、杉並区はじめ23区には多くの「木造密集地帯」があります。首都直下型地震があれば倒壊・火災の被害が多いと予測されています。予測される死亡者1万人の半数以上は火災によるものです。常緑広葉樹の防火・防災効果は高いものの国、東京都は防災・減災のための植樹には取り組んでいません。都市計画の中に位置づけることが活動の推進力になります。
2. 近年、温暖化、ヒートアイランド化、巨大台風の発生など頻発しています。これらの影響を減らし、環境の改善のために常緑広葉樹の効果は高いと言われています。
3. 孤独死は現在3万人以上、今後超高速高齢化社会の到来で激増すると年間20万人にもなると予測されています。高齢者の孤独・孤独死を防ぎ、一人暮らし高齢者（特に男性）の社会活動への参加を進め、多世代交流の推進が求められています。これらの活動を総合的に、市民運動としてすすめるためのとりくみが求められており、いのちの森づくりは役割を果たし得ると考えます。

他団体と協同することで発見したこと

- ①23区に木を植え、育てることが必要ではありますが、とりくみにくい課題であり、既存の団体はほとんど挑戦していないこと。
- ②23区に木を植えるという課題を提起し、協同をよびかけることにより既存の団体のとりくみを刺激し、協同を進めることができました。また、23区に森をつくろうというよびかけが期待されていることを知ることができました。

将来イメージ

23区全体に、東京に常緑広葉樹を中心にした「いのちの森」づくりの活動を広げること。森づくりの複合的な意義を議論する場を大規模に組織し、とりくみを広げていきたいです。すでにある森づくりのとりくみに、多様な視点を提起できるような運動を広げたいです。首都直下型地震、南海トラフ地震が30年以内に70%もの率で予測されているいま、実際に木を植え、育てるとりくみで実績を積み上げたいと考えます。

成果と教訓

成果

- ①東京23区に木を植え、育てるという課題にとりくむ組織がほとんどない中、この課題にとりくむ組織として、この課題の重要性と可能性を発信することができました。
- ②活動やイベントに関して発信することで、協同でとりくむ組織のネットワークづくりに貢献できました。
- ③防火・防災、環境保護、森づくりの専門家との協同、問題意識の広がりに役立つことができました。

教訓

課題の大きさからみて持続的な組織がほしいと思いますが、活動を急速に運動を進めなければならないため恒常的な組織を作ることには手数料を奪われることはできません。実行委員会として短期集中的に活動し、目標達成を目指さなければならないと考えています。

鹿児島県生活協同組合連合会

活動名 | 鹿児島県における「生活支援」の実践交流の場と情報ネットワークづくり

活動のきっかけ

2016年度は県生協連を中心として生協や県社協、地域包括支援センター 10団体で実行委員会をつくり、「地域包括ケア」をテーマに学習交流会を企画しました。県内の行政担当者や社協、事業者など260名が参加し、民間からの自主的な取組ということで評価も高く、地域づくりの手引となっています。しかし、2016年度は理念的な「生活支援とは何か」を共有化することが精いっぱい、実践例の掘り起こしや共有化には至りませんでした。

協同した団体

- 鹿児島県社会福祉協議会
- 鹿児島県
- 曾於市・鹿児島市

活動内容概要

昨年に引き続き、鹿児島県生協連加盟4生協（県連含む）、行政、県社協、社福、NPOなど9団体1個人で実行委員会を結成し、「みんながつくる地域包括ケア」をテーマにした第2回目の学習交流会を開催しました。2017年度は「鹿児島県内」「住民主体」をテーマに鹿児島純心女子大八田教授の基調講演、鹿児島県内3団体の住民団体からの実践報告、及びパネルディスカッションを内容とし2018年1月24日鹿児島市内会場で（360名の参加申し込みと）約300名の当日参加を得ました。講演、報告とも好評でした。



今回は離島からも実行委員会団体を実質参加いただき実行委員会への離島の状況について報告を行いました。また鹿児島県の企画という形で支援を受け実行委員2名を離島3市町（奄美大島）に面談調査を行い、ネットワーク構築を図りました。

他団体と協同することで発見したこと

- 生協という枠の中だけでは分からない『住民』の活動の必要性や実践を通じて知ること、生協の組合員活動としての『住民活動』を課題として追及する必要性を感じました。
- 地域の中では様々な団体や人々（社協や行政、住民団体や民生委員など）が実に多彩で、主体的な活動を行っている、中には地域通貨に通じるような活動を自主的に行っていることに驚かされました。
- 同じ『住民』が主人公の協同組合としての生協について、協同の活動を行うことを通じて理解してもらい、事業も含めて、生協が地域づくりのパートナーとして認識してもらえる事ができるということを発見しました。

将来イメージ

- 助成を受けなくてもそれぞれが手弁当で作る実行委員会を目指したいと考えています。任意の実行委員会の自主的な企画として継続していくことで、「地域包括ケア」という街づくり、地域づくりを住民本位でより主体的、民主的に行っていく機運を広げたいです。
- このような住民本位の街づくりの重要な構成員としての生協の存在についての認識を広げたいと思います。
- 回数を重ねる事で住民団体相互の関係性が強まり、地域単位での情報交換などの協同企画が出来るようにしたいです。

成果と教訓

成果

- あらたに鹿児島市がオブザーバーで毎回の実行委員会に参加し、参加案内等が前進しました。
- 参加者数は昨年の260名に対して300名に増えました（当日は悪天候のため欠席が増えましたが申し込みは360名と昨年より100名増です）。また生協組合員、地域住民という「地域包括ケア」の主人公と言われる層の参加は約150名と倍になりました。
- 実行委員長を中心に実行委員団体の結び付きや行政との結び付きが強まりました。鹿児島県の主催する生活支援コーディネーターの研修には昨年の企画講師の小坂田教授が講義しました。また鹿児島県の委員という形ですが奄美大島の1市2町に面談の機会を作っていただきネットワークを広げることができました。
- 今回は離島からの報告を重視し、奄美医療生協に3回の実行委員会に参加いただき離島の生活支援の報告を得ました。
- 結果、生協が地域づくりのパートナーであるという認識が地域に広がっています。新たに事業体委員の就任は4自治体、生活支援に関する地域の催しや地域ケア会議などへの参加要請が大幅に増えています。

教訓

- 2回目の企画ですが、既に認知が広がっており、継続が重要だと認識しました。
- 今回の企画テーマを「鹿児島県」「住民」としました。生協組合員も参加しやすく、社協の役員や民生委員などの参加が多く好評でした。
- 実行委員会による協同企画となったことで、住民が主体的に施設作りや運営に関わっていたり、野菜提供者に食事券を交換するなど進んだ事例を知ることができました。

一般社団法人 やまなし空と風

活動名 | ほくとProof of Lifeプロジェクト(人それぞれの生きる証を見つける活動)

活動のきっかけ

医療・福祉・教育の最新研究を活かしながら、それぞれの経験・知見をもとに、一人一人が、居場所、憩い、生きがいを見出し、かけがえのない存在であることに気づき、健康寿命の延伸をはかることを目的にしたプログラムを市民レベルで実施していくために、一般社団法人やまなし空と風を設立しました。

活動内容概要

山梨県北杜市にある古民家をベースに、①医師を招いて、皆で語り合ったりリクレーション中で生老病死や健康に気づく「健康よろずカフェ」、②わいわいと食事と、映画、落語、運動などを楽しむ「わいわいとばあちゃんバイキング&映画を観ようDAY」、③スウェーデンで開発された音楽ケア「スウェーデン発音楽ケア＝ブンネメソッド」体験会を行いました。



協同した団体

- 生活協同組合ユーコープ
やまなし県本部

地域の概要

山梨県北杜市は、ユネスコエコパークに認定されたように美しく豊かな自然にあふれています。東京からアクセスもよく定年後の移住先としてもとても人気が高いです。

現在、人口48,300人で、高齢化率が34.6%と、全国の27.0%を上回っており、さらに一人暮らしや高齢者のみの世帯も増加しており、社会との関わりが薄くなり、病気の早期発見が困難になるなどの状況が起きています。さらに、今後も高齢者の増加が予想されています。

他団体と協同することで発見したこと

ユーコープやまなし県本部には、活動告知、当日の一部商品提供、活動全般の企画・運営に対するアドバイスなどをいただきました。

協同で行うことで、独りよがりではない企画ができました。地域に根ざして地域の方の「生きる」を支える活動を行っているユーコープやまなし県本部と、医療・教育・マスコミなどの有識者にネットワークを持ち様々な企画を考えた当法人がコラボレーションすることで、より有意義な企画立案、運営ができました。

将来イメージ

今年度展開してきた目的、活動プログラムを継続し、さらに当法人のもう一つの活動である発達障害のサポート活動と融合することで、ユニバーサル社会の実現に貢献できるプログラムを、関係委医療学会(日本プライマリケア連合学会など)、マスコミ、発達障害関係団体、他の市民団体などとの連携、自治体・行政のアドバイスなどにより企画・運営し、モデル化をはかる予定です。さらに、そのモデルを、他の地域で展開していきたいと考えています。

成果と教訓

成果

参加する方々が、居場所、憩い、生きがいを見出し、かけがえのない存在であることに気づき、健康寿命の延伸に繋がることに微力ながらも貢献できました。参加者の方々には、健康意識を醸成することができ、より豊かな人生を送るために人生観・死生観を考える大切さに気づきを得ることもできました。古民家という場を使うことで、医師、参加者、私たちスタッフが、担い手と受け手ではなく同じ目線でお互いを認め合い、支え合う存在であることに気づくこともできました。

参加者からは「役に立った」「楽しかった」「継続して欲しい」「お医者さんと色々な話ができて良かった」などといった感想をいただきました。さらに医師の方々からも、病院では体験できない空間と時間によって、超高齢社会、多死社会、2025年問題に向けて、あるべき医師と患者の関係、地域医療・多職種連携・予防医療のあり方を進めていくためのヒントを得たとの評価をいただいたことも大きな成果でした。

教訓

- 一般の方々の、国・自治体・行政の医療・福祉制度、ならびに健康・疾患などに対する情報リテラシーが予想以上に大きいこと。
- 地元の方々との関係を構築するにあたり、地縁、血縁を大切にすることの地方独自の人間関係を認識して活動を展開することの大切さ。
- 山梨県北杜市武川町の地元のイベントやお祭りはもとより、それ以上に、お彼岸、お盆、法事などの法事行事、田植え、稲刈りなどの農作業を、各家庭だけでなく地区に住む住民の方々が集まり共に過ごすことを大切にしているため、活動の日程をよりきめ細かく設定する必要があること。

富山県生活協同組合連合会

活動名 | 福島の子ども保養プロジェクト in とやま2017

活動のきっかけ

福島の子どもたちは、まだまだ他県のように気兼ねなく外で思い切り遊べる環境にはありません。また、親御さんも積極的に外遊びをさせられる状況にはありません。子どもの心身の健康に不安を感じる現地の保護者の気持ちに寄り添い、支援することを目的として活動を始めました。

活動内容概要

夏休み期間中の2泊3日の日程で、福島の子どもを招いて「福島の子ども保養プロジェクト in とやま2017」を、富山県朝日町で開催しました。



協同した団体

- あさひふるさと体験推進協議会
- グリーンツーリズムとやま

地域の概要

福島の子どもの心身の健康に不安を感じる保護者の気持ちに寄り添い、支援することを目的としています。2011年10月から企画し2016年で合計10企画62家族199名の参加となっています。毎年、参加家族からは感謝の言葉をいただいております。継続していきたいと考えています。



他団体と協同することで発見したこと

あさひふるさと体験推進協議会には朝日町での子ども保養プロジェクトのプログラム作成及びボランティアとの連携を、グリーンツーリズムとやまには子ども保養プロジェクトのプログラムで朝日町の夢想塾にて行った自然体験について協力をいただきました。

以前は個別に取り組み先と打ち合わせをして、取り組みごとに担当者も異なっていましたが、地元の方々がボランティアに協力して頂けたことで、横のつながりが強くなり対応窓口も1本化され、大変スムーズに取り組みが出来ました。また、状況に応じ柔軟に対応して頂き、参加された福島のご家族は大変満足されていました。

将来イメージ

より多くの福島のご家族に富山県朝日町に来ていただき、第2の故郷と思っていただければ幸いです。生協組合員、職員及びボランティアで参加された皆さんが、福島を忘れないよう絆を結ぶ場としていきたいです。

成果と教訓

成果

福島より8家族23名を招き、生協関係スタッフ53名、朝日町ボランティア24名で取り組みました。福島のご家族にはアンケートに答えていただいております（子ども9人、大人5人）、海水浴や釣り、山でのジップラインやブランコ等、自然の中で思いっきり遊べたことが楽しかったと回答がありました。また、お母さんからは朝日町のみなさんを始めスタッフのみなさんへの感謝のお言葉を頂いております。

スタッフアンケートでは18人から回答を頂いており、福島のご家族と人生の輝く1ページとなる貴重な時間を共に出来たよかったですとの意見がありました。

教訓

福島のご家族+朝日町+生協が一体となり、より深い絆となる活動となりました。

生活協同組合コープ自然派奈良

活動名 | 原発事故被災者の「保養の旅えんむすび」避難者交流会 [紅茶の時間]

活動のきっかけ

1. 東日本大震災・東京電力福島第一原発の事故から6年経ちましたが、今も原発事故は続き、多くの方が放射能影響からの保養を希望しています。避難したくてもできない事情の方々は地域で孤立しやすく、放射能や保養のことについて誰にも相談できずに苦しんでいます。そうした方たちの心と身体をリフレッシュできる保養の場を提供します。
 2. 震災後、奈良県内に避難してきた人たちは、親類や知人のいない土地で孤独を感じながら故郷に帰ることもできず、避難後も苦しみが続いています。避難者支援打ち切りなど厳しい状況が続くなかで、定期的に安心して語り合える場、情報を得られる場を提供します。
 3. 被災地の方々の「原発事故を忘れないでほしい」という強い願いに応え、風化させないことが大切です。地域で共に考え、支え合うつながりを広げます。
- すべての人が安心して暮らせる社会を願い、一連の企画を開催します。

活動内容概要

健康に不安を感じる現地の人たちの気持ちに寄り添い心身をリフレッシュする保養キャンプと、奈良県へ避難してきた人々を対象とした交流の2本柱で活動を行いました。

1. 「保養の旅えんむすび夏の保養キャンプ2017」(7月4日5日)

福島県、千葉県、東京都の6家族20名が参加し、食事や身体の手当てなど免疫力を高めるプログラムと、子どもたちが自然の中でゆったりと自由に遊ぶ時間をメインに様々な体験活動を行いました。

【楽しむプログラム】東大寺・奈良公園散策、草木染め野染め、星空映画上映会、ミツロウキャンドル作り、川遊び、ライブ流しそうめん、種ブローチ作り など

【デトックスプログラム】穀物菜食の食事、からだほぐし など

2. 「紅茶の時間」(月1回ペースで年10回開催)

避難者の方たちが安心して話しあえるオープンスペース「紅茶の時間」を定期的に開催しました。

3. 鎌仲ひとみ監督「小さき声のカノン」上映会

上映会を開催し、地域の人とともに保養の大切さを考える機会を持ちました。

協同した団体

- 保養の旅えんむすび
- nara-action
- 特定非営利活動法人
奈良NPOセンター



他団体と協同することで発見したこと

- それぞれの団体のスキルを活かして得意分野をリードしながら積極的に参画することで、誰もが無理をせず、楽しく活動を進めることができました。
- 個々の団体のネットワークを持ち寄り、取り組みや思いをより広く伝えることができました。
- 協同することで客観的・俯瞰的な視点が加わり、次の活動への可能性が見えてきました。

将来イメージ

年々被災地への思いが薄れがちな今だからこそ、地域で多様な連携の輪を広げ、息の長い活動を続けていきたいと思っています。

今年の保養キャンプのアートプログラムでは年齢も立場も超えて笑顔が広がり、アートの持つ心を開き、心を結ぶ力を実感しました。今後は地元のアーティストや大学とも連携し、被災地とつながり、地域の人と人を結ぶ活動を広げていきたいと考えています。

成果と教訓

成果

- 保養キャンプでは、子どもたちは自然のなかでのびのびと遊び、大人は心身を休めてほっと一息ついて不安を語り合ったり、人間関係を広げる機会となりました。28名のボランティアにとっては現地の声を知る貴重な機会です。
 - 参加者アンケートの「6年経った今だからこそ、不安が増している私たちを受け入れて下さり本当に感謝します」「食をしっかりと、身体作りをしっかりしていけば放射能には負けない!と自分に自信がもてるようになるのかなと今回の保養で気づかされました」という言葉に励まされました。
 - 「紅茶の時間」には年間で70名の方が参加し、地域の脱原発・避難者支援を目指す人の輪を広げ、保養キャンプへの県議、市議の参加にもつながりました。
- 「小さき声のカノン」上映会では、参加した35名の方と保養キャンプの大切さを共有しました。被災地への思いを風化させることなく支えあい続けたいと思います。

教訓

- 保養キャンプ中の子どもの健康状態などの情報を短時間ボランティアも含めた全員が共有できるよう心がけました。
- それぞれの活動ごとに会計処理を分担しましたが、今後は途中段階での情報共有をもう少し丁寧になりたいと思います。

テーマ

3

女性と子どもが 生き生きする



特定非営利活動法人 いなほ

活動名

地域住民が主体となって行う子どもの健全育成等を目的とした
共生型「子ども食堂」の運営支援事業

活動のきっかけ

当法人は岩手県社会福祉協議会に在籍していた職員が中心となって立ち上げた団体で、岩手県に居住する住民が、年齢、障がいの有無にかかわらず、地域の中でそれぞれの生きがいを見つけ、自分らしい生活を送ることが出来るよう、交流や学びの場を提供し、健康の増進、生活意欲の向上、社会的孤立の防止、生活困窮からの自立支援に寄与することを目的に設立しました。

活動内容概要

盛岡市、滝沢市在住の方を対象に、「食を通した子どもの健全育成」「親の支援」「第三の居場所づくり」を目的に、障害の有無や年齢にかかわらず、子どもから大人まで多くの方が集まるコミュニティの場として、子ども食堂を3か所で計27回開催しました。



協同した団体

- 岩手県生活協同組合連合会
- 滝沢市社会福祉協議会
- わらしやん井
- ママごはんクラブ

地域の概要

現在日本全体として、児童の食事について注目されています。貧困、一人親世帯、共働き世帯の子どもが一人で、コンビニ飯、給食だけのご飯をとっているという現実には岩手県においても例外ではありません。そのような中で、たくさんの人たちと栄養の整った食事と楽しい時間を共有することで、地域とのつながりも芽生えて、心身の健全育成を行う「こども食堂」という活動が注目を集めています。

学校関係者等にヒヤリングを行った際にも子ども食堂に関する意見が多く、全国で行われている「子ども食堂」の普及を求める声が多く聞かれました。また、実際に地域活動を行っている民生委員や主任児童委員の声からも、地域で子どもを見守ることやその親を支援する仕組みづくりが必要とされていることがわかりました。

こうした活動に興味を持ち自分たちの住む地域でも開催したいと考える住民は多く、立ち上げと初期の運営支援を行う機関が必要とされています。

他団体と協同することで発見したこと

- 子育て支援や子どもの貧困などに対して、多くの方が同じような思いを持ち何らかの支援が必要と考えていること。
- 一機関ではできないことでも、複数の機関や地域の方々が協同することで、不可能と考えられていたことが可能となったり、より内容の濃いサービスが提供できること。
- お互いの得意とする分野を積極的に生かすことで、継続的にかかわり続けていくことが可能であること。

将来イメージ

子育て支援やコミュニティづくりにスポットをあてている部分も多いため、地域の方々が行う活動となることが理想と考えています。そのため、地域のボランティアの受け入れを促進するとともに、食材や寄付を地域の方や企業から定期的に受けられる仕組みづくりに力を入れていきたいと考えています。

成果と教訓

成果

- 回を重ねるごとに参加者が増え、より多くの方に参加いただきました。
- 実際に家庭に課題を抱える方へのアプローチもできる環境が整いつつあり、実際の支援につながったケースもあります。
- ボランティアで参加したいなどの申し出が以前より増えてきています。
- 活動されているボランティアの方々の生きがい、やりがいにもつながっていると考えています。

教訓

- 地域に根差し、認知され必要とされる活動にするために、衛生管理面の徹底の必要性を改めて実感しました。
- 「子ども食堂＝貧困」という先入観を持たれている方が多く、本活動のような、子育て支援、コミュニティづくりにスポットをあてた取り組みについては理解を得にくいと感じています。本活動には専門的な知識のあるスタッフがかかわっており、家庭で抱える悩み事や課題解決のきっかけとなる機能を持たせています。このことを周知し、より多くの方が参加しやすく、且つ課題解決につながる場であることアピールする必要があると感じています。

特定非営利活動法人 ユースコミュニティ

活動名 | 地域子ども未来塾（低学力など、学習環境に困難を抱える子どもの学習教室）

活動のきっかけ

貧困の連鎖を防ぐため、学習機会の平等をめざした学習支援の取り組みが日本各地で盛んに行われている中、「塾に行けない子どもは基礎学力を保证されなくていいのか?」と疑問に感じた地域の大人が中心となり学習支援団体を設立しました。学校や塾とは違う第三の教育機関になること、勉強が苦手な子どもたちの居場所となることを目指し、落ちこぼれをつくらぬ欧州教育のメソッドを手本に活動しています。

活動内容概要

学習環境に困難を抱える子どもたちの学習支援に取り組みました。パルシステム東京の大田センターの会議室にて、毎週月曜の夜に開催。利用希望者増により、今年度は会議室を2カ所使用させてもらいました。昨年度に引き続き通信教育の教材メーカーとも提携。教室指導に通信教育を合わせて活動を行いました。

また、子どもの学習の指導には地域の社会人や大学生などで構成されるボランティアの協力を得ながら、子どもに対面で指導とともに、一泊二日の交流合宿にも取り組みました。



協同した団体

- 生活協同組合パルシステム東京
- 大田区社会福祉協議会
- セカンドハーベストジャパン

地域の概要

大田区の調査によると、小中学生の不登校児童は約400人おり、その状況も複雑かつ多様化しています。不登校児が抱える大きな問題の一つに基礎学力があります。学校の授業のペースについていけない子どもは、学習意欲・登校意欲の減退を招き、その結果、基礎学力が身につかず将来にわたるハンデを抱えてしまいます。「居場所」を新たにすることで、学力とともに自己肯定感（自信）を回復させ、学習意欲の惹起、不登校の減少、低学力の改善、学校授業の理解から高校進学へつなぎ、子どもたちの将来に可能性を広げられるような活動を目指します。



他団体と協同することで発見したこと

パルシステム東京には会場提供・広報・地域イベントの共催を、大田区社会福祉協議会にはボランティア募集と困窮家庭への福祉のつなぎを、セカンドハーベストジャパンには食生活に困難を抱える家庭への食材提供などを、それぞれ担っていただきました。

パルシステム東京のご協力のもと、地域と多く触れ合い、地域特有のニーズを詳しく把握することができました。大田センターがある仲池上の地域は、高級住宅地が近く比較的裕福なところですが、多様な困難（発達障害・不登校など）を抱える子どもが多くいることがわかりました。さらに、私立中学に入学したものの学習についていけず、私立の学費に加え塾代までは難しいという家庭からの参加もあり、学習支援の多様なニーズがあることがわかりました。また、社会福祉協議会など福祉につなげる活動では、家庭ごとの様々な困難・生きづらさ（親戚同士の借金問題など）を実感しました。

将来イメージ

生徒が増え、財政的にも事業収入が増え教室の安定した運営を行うことができました。

今後は学習支援だけに留まらず、子どもたちの居場所づくりを充実させ、イベント活動のさらなる企画・実施や地域と連携した活動（町会・自治会と連携したお祭りのお手伝いなど）についても積極的に取り組みたいと思っています。

成果と教訓

成果

助成2年目となり、生徒数が9人から20人に増えました。そのうち10人は中学3年生でしたが、ほとんどの生徒が1次志望に合格。難関校の合格者を出すなど進学面の成果を出すことができました。ボランティアもさらに定着し、活動が前進しました。秋には一泊二日の合宿活動を実施し、支援者と子どもたちの交流を深めました。

スタッフ研修も定期的に行いました。困難を抱える子どもたちへの支援方法について学び、実践に生かしています。さらに、パルシステムさんの広報誌にて活動が大きく取り上げられたことから、新たな支援者の参加が見込まれるのではないかと考えています。

教訓

今年度は特に大きな広報はしませんでした。昨年度よりも多くの問い合わせがあり、地道な地域活動の成果が出てきたと考えています。

利用者が増加したことで、学習や教室内の過ごし方、または保護者との連絡などがより複雑になり、一定の業務マニュアルやボランティアマニュアルの作成の必要性を痛感しました。特に個人情報や危機管理については、研修の中でもスタッフ内で学習・共有しました。

新潟県立大学 南相馬市子ども支援プログラム

活動名 | 南相馬市児童クラブにおける「交流おやつタイム」を活用した継続支援プログラム

活動のきっかけ

新潟県内には、福島県南相馬市からの震災避難者が多く、保護者の都合により帰郷する子どもたちも少なくありません。このような背景から、南相馬市の子どもたちへの支援活動は急務であると判断し、特に福祉的ニーズがあると判断される放課後児童クラブへの支援を実施しています。

活動内容概要

福島県南相馬市の放課後児童クラブ（学童保育）を対象に、「継続的な」交流おやつタイムを実施することで、子どもたちの豊かな放課後の生活づくりを支援しました。

その際、おやつパッケージを届けるだけでなく、コープにいがた組合員や子ども支援スタッフの協力を受けながら、「大型絵本の読み聞かせ（かわいそうなぞう）」を実施することで、子どもとおとなが交流する「交流おやつタイム」を実施することができました。具体的には、新潟県立大学が、コープにいがたおよび南相馬市教育委員会と協同して、放課後児童クラブ（15クラブ 約650名）を訪問し、「交流おやつタイム」を実施しました。



協同した団体

- 生活協同組合コープにいがた
- 南相馬市教育委員会

地域の概要

①【子ども支援】

福島県南相馬市の放課後児童クラブ（学童保育）では、2011年の震災後に、おやつタイムが中断されています。しかし、子どもたちの豊かな放課後の生活を取り戻すためには、おやつタイムを通じた、異年齢集団の健全育成のための子ども支援が不可欠です。

②【子どもたちの声】

震災直後から、コープにいがたと協同して、南相馬市放課後児童クラブ13か所（子ども約600名）を対象に、定期的におやつパッケージを届ける支援を実施してきた結果、子どもたちから感謝のメッセージが届けられるようになりました。

①【子ども支援】と、②【子どもたちの声】を支援プログラムで継続的につなぐことを目的に活動を開始しました。

他団体と協同することで発見したこと

コープにいがたには協同での企画と交流等、南相馬市教育委員会には現地での連絡調整を担っていただきました。

コープにいがたとの協同で、支援を要する子どもたちに安全・安心なおやつパッケージを届けてくれる団体として、被災地で高い信頼を得ていることがわかりました。さらに、南相馬市教育委員会との協同は、対象となる被災地の子どもたちとの信頼関係の構築に寄与することがわかりました。

将来イメージ

プログラムを南相馬市教育委員会と協同して実施したことで、現地での定着が見込まれます。今回の申請活動の一部は、これまでも実施されていた活動でもあったことから、将来的には、南相馬市教育委員会主催の活動プログラムへと発展させることで、より継続的な活動ができると考えています。

成果と教訓

成果

「交流おやつタイム」を繰り返し実施することは、プログラム実施者と子どもたちとの信頼関係を構築する有効な手段となりました。また、コープにいがた組合員による「大型絵本の読み聞かせ（かわいそうなぞう）」は、実施者と子どもたちとの交流を促すプログラムとなりました。

南相馬市の子どもたちとの交流後は、参加したすべての子どもたち「またね」の約束をしてプログラムを終了しました。このような信頼関係にもとづく「いつも気にかけてくれるおとなたち」との交流活動は、子どもたち自身の喜びと自己肯定感を育み、子どもたちの将来の希望へとつながることを確信しました。

（参加者数）

子ども：650人（南相馬市）
おとな：30人（南相馬市）
スタッフ等：40人（コープにいがた、新潟県立大学）

教訓

被災地における子ども支援は、継続的、重層的にかかわることが必要です。複数回の連続プログラムにしたことは有効だったと感じます。さらに、コープにいがた、南相馬市教育委員会など複数の団体と協働することで、重層的な子ども支援を実施できました。

青森県民生活協同組合

活動名 | 生協店内での子育て応援 遊び場づくり

活動のきっかけ

地域により身近な場所で、子育てと生活をより楽に出来ないかと考えました。生協のお店の空きスペースを利用して、地域の親子に遊び場の提供をします。遊び場を目的に来店しても良いし、お買い物のついでに遊んで行っても良い空間です。

スタッフは地域のNPO団体と協働し、子連れのスタッフなども配置します。買い物の間、小さい子供を預けたいというニーズもあり、短時間の預かりなどが出来て、買い物をゆっくりしてもらえ環境づくりも出来るかチャレンジしたいと考えました。

協同した団体

- 子育てオーダーメイド・サポートこもも
- あおぞらフォト

活動内容概要

- ・乳幼児の遊び場の提供
- ・講師を呼んでの講座開催
- ・ベビーグッズの販売
- ・ママ同士の情報交換
- ・居場所づくり



他団体と協同することで発見したこと

【生協側より】

宣伝は店内掲示のみでしたが、活動内容が組合員のニーズに合ったものでしたので、利用者同士の情報交換で広がり、大きな広告宣伝なしでも利用者が増えていきました。

【こもも側より】

「買い物ついでに遊べて良い」「お昼を用意しなくても、遊ばせつつ食べることが出来る」「敷居が高くないので、気軽に来ることが出来る」「駐車料金がからなくて良い」「フリードリンク（水、お湯、お茶）があって助かる」など、利用者にとって多数のメリットのある取り組みができました。

成果と教訓

成果

【生協側より】

当店で活動してもらう事により、利用されたご家族が帰りにお買いものをしてくれたので売上増に繋がりました。

【こもも側より】

お店の従業員の方も、休日に子供を連れてきてくださったりしました。
合計来場者数（大人166人、子供175人、合計337人）
イベント開催（16件、合計34回）
足つぽマッサージ×12回、絵本読み聞かせ、塩講座、手遊び講座、ベビーフォト撮影会、折り紙教室、手作りおもちゃ講座、ロイヤルマッサージ、オープンマッサージ×6回、美人眉毛レッスン、布ナプキン講座、ママの学viva×2回、マネー講座、おむつなし講座、個性心理学、ベビーグッズ販売×2回

教訓

【生協側より】

生協として地域に貢献することができ、店舗が、より地域の暮らしにお役立ちできる存在となることができました。必要とされる方々の為に尽くしていけば、後々良い結果として自分たちに戻ってくることがわかりました。

【こもも側より】

子育て中のお母さんにとって、買い物ついでに子供を遊ばせる環境があることは助かることが確認できました。外に出入りする自動ドアがすぐ近くだったため冬場は寒く、夏も店内の食品保存のための冷房が強くて寒かったことが反省点です。店内に音楽が流れていることもあり、ご迷惑になると予想し音を出しイベントは開催できませんでした。また、ストレッチ・ヨガなど体を動かすイベントも騒々しくなると予想し、開催できませんでした。

将来イメージ

【生協側より】

- 小さい子どもたちが安全に遊べる空間を店内に造り、買い物ついでに子どもたちを遊ばせることが出来る店舗になれば、若いご家族の利用者も増え子育て支援になるのではないかと感じました。
- 「子ども食堂」の創設により、より子どもたちの暮らしの安全安心に貢献することも考えられます。

【こもも側より】

- 買い物中に、預けられる「託児」があるとよいと思います。
- お金がかからない遊び場の重要性を感じています。
- 週1~2ではなく、毎日開催していると良いと考えています。

まんまるママいわて

活動名 | 助産師と母親がつながる、子育ての居場所づくり事業

活動のきっかけ

東日本大震災による、沿岸被災妊産婦の内陸避難支援事業を行った助産師が、事業終了後も対象者の支援を継続していく必要を感じ団体を設立しました。相談・アドバイスができる場として、子育てサロン開催を開始。内陸避難者・移住者の多い地域でもサロンを開催することで、地域とのつながりも生まれ、岩手県内全域でサロン活動を行っています。現在は全妊婦・母親を対象として活動しています。

活動内容概要

1. 助産師が運営する子育てサロン（月1回）

母親の学びやリフレッシュの機会を提供しました。歯科衛生士や防災士から学ぶ機会や、助産師ならではの母乳や産後の講座も開催しました。

2. ヨガ教室（月1回）

妊娠中の腰痛や安産への体力作り、子育て中の母親の肩こり・腰痛・体力作りに配慮したポーズを多く取り入れ、家庭でもできるアドバイスなど伝えました。相談タイムでは、助産師が母子の健康相談の他、子育てのアドバイスも行いました。

3. 料理教室（年3回）

大人分の調理途中から離乳食に取り分ける工夫や、大人には別添えでタレをつけるなどの工夫を伝えました。乾物や旬の食材の取り入れ方などアドバイスしました。

1.～3.すべてに助産師が常駐し、母親自身の悩みや、子育ての悩みを気軽に相談でき、母親同士が交流できるよう配慮しました。妊娠中から出産後まで切れ目ないサポートの場としました。



協同した団体

●いわて生活協同組合

地域の概要

岩手県内は分娩施設の集約化が進み、病院で十分に不安を相談できないまま出産に臨んだり、産後も孤立しやすい環境です。産後のイメージがないまま子育てがはじまり、孤独感や困難を感じる母親が増えています。子育てを体験的に学ぶ機会が乏しく、子育てに困難を感じる母親も増えています。

一方、行政等による子育て講座は、母親の心身の健康に働きかけるものが少なく、母親自身、自分のために時間を使うことに消極的です。しかし自分の時間を持ってないストレスが、子育てへのストレスにつながっています。

また、情報過多の現代で、母親たちは育児情報の選択に混乱しています。情報を整理し提供する場が必要です。

専門職である助産師が支援することで、母親たちが心身の健康を保ち、子育てへの自信を持つことができると考えています。

他団体と協同することで発見したこと

いわて生協と関わることで、育児サポート制度や夕食宅配・様々な離乳食商品の情報を得ることができ、母親たちに伝えることができました。また、いわて生協の子育て広場等に参加することで、広場の運営や広報の仕方、託児のサポートの仕方等学びました。

将来イメージ

- 北上市・行政の産前産後ケア事業・子育て事業等に組み込まれ、行政委託事業として継続的に提供できること。
- 妊婦や母親たちが悩みを相談できる場として定着すること。

成果と教訓

成果

- ①参加者数▶参加者数はのべ510名（大人266名、子ども244名）と、想定を上回りました。妊婦の参加も25名あり、病院や行政の母親学級以外に、地域の中で妊娠中から産後に備えられる場として活用され、産前から子育て期まで継続した支援を行うことができました。
- ②アンケート集計結果▶アンケートの結果、満足度は100%（とても満足79%、満足21%）でした。参加後に「前向きになった」「元気になった」という回答を多くいただき、リピーターも多く、参加者の満足度の高い活動ができました。
- ③相談内容と件数▶事業の中で寄せられた相談は86件で、「母乳」「妊娠」「育児発達」等、助産師ならではの内容が多く寄せられました。助産師と話し、「大丈夫」と言ってもらえるだけで安心し、子育てに自信を取り戻す母親も多くいました。頑張っている母親たちが認められ肯定される場の大切さを、活動を通して感じました。
- ④参加者居住地▶遠方からの参加者も多く、岩手県内の広い地域の母親たちに認知され、活用されました。

教訓

- 母親たちは子育て中の居場所だけでなく、学んだり健康作りができる場を必要としています。
- 助産師と関わる場を設けることで、出産や子育ての不安を軽減できました。
- 行政の広報、新聞等を通じてより多くの方に情報を提供することができ、積極的に活用すべきと感じました。SNS等での発信も定期的に行うことが有効だとわかりました。

特定非営利活動法人 エー・ビー・シー野外教育センター

活動名 | 子育てママの「心も体も気軽な学び場」事業

活動のきっかけ

子育てママたちに向けて「子育て環境について」の参加型学習会と「子どもたちへの食育料理教室」を託児の準備をして開催したいと考えました。自分のための有意義な時間を作ったり、孤独な子育てから抜け出して、仲間と一緒に育てていく環境を体験することができます。

活動内容概要

グリーンコープ内の研修室と佐伯市弥生の「子育て支援センター」の2会場でそれぞれ4回ずつ研修会を実施しました。それぞれの会場で託児を行いながら、10:00～12:00の120分間の参加型研修会を行いました。

テーマは主に「学びあう環境づくり」「親」「こころ」「しつけ」など子育て全般について参加者同士で交流しながら学びました。更に30分で子供のための料理教室を行い、楽しく、参加者の親子同士で試食をしました。



協同した団体

- グリーンコープ生活協同組合おおいた
- ワーカーズ・コレクティブ
キッチンスタジオ すまいる
- 社会福祉法人グリーンコープ
福祉サービスセンター であい・ふれあい

地域の概要

子育てに追われるママたちにとって、子どもを預かってくれて、しっかりと学べる場などはとても少ないです。一方では家庭に孤立して子育てをしている環境もあります。

他団体と協同することで発見したこと

グリーンコープ生協おおいたには参加者募集と研修場所の提供を、キッチンスタジオ すまいるには料理教室の計画・準備・実施を、福祉サービスセンターであい・ふれあいには託児を、それぞれ担っていただきました。

託児・料理教室などを各々の得意分野を発揮し協同で行うことで、参加者目線のプログラムになりました。また、その親しみやすく安心した環境にて研修を実施することで、参加者の心の充実感につながりました。

「子育て支援の充実」という同じ目的を持つ団体同士が今後つながるような良い関係性を築くことができました。

将来イメージ

- 様々な地域で実施できるよう関係者に働きかけていきたいです。
- 会場を行政が管理するセンターで行うことでこの事業を知っていただき、行政からの補助が受けられるような流れを作り継続していきたいと考えます。
- 受益者負担を増やしても参加者が確保できるよう計画していきたいです。

成果と教訓

成果

子育て中のママに安心してひと時の自分の時間を取ってもらうため、託児スタッフと連携して、子どもと離れることが心配な方には研修の休憩時間に子どもの様子を伝えるなど、託児を充実させることができました。また、料理教室は癒しと、仲間づくりに最適なりフレッシュの場にもなったという声を多くいただきました。

また、研修では「Nobody's perfect（誰も完璧な親なんていない）」という参加型研修会をおこなったことで、周りに助けてもらいながらも、子育ての様々な問題や悩みに対して、自ら解決していくような考え方や方法を学んでいただくことができました。

2会場で研修会を実施でき、大分会場は名簿上12名登録し、計4回でのべ35人の参加があり、佐伯会場は名簿上15名登録し、計4回で50人の参加がありました。佐伯会場では併設している児童館の職員の方の見学や参加もあり、今後の連携などについても話をすることができ、地域の子育て支援にも貢献できました。

教訓

- 気軽に楽しい場、初対面同士の学びあいのためのルールづくりを行うこと、メリハリのある研修内容、単なる知識ではない「子育てする力」を養う内容であることが事業の充実と継続に大切なポイントであること。
- 他団体と共同することで事業自体の新たな可能性が広がり、個々の団体の発展にもつながるということ。
- 募集に関して会場との事務や細かい調整など戸惑った点もあった。
- 冬の実施は子どもが体調を崩しやすく、参加者の欠席があること。

生活協同組合コープこうべ

活動名 | コープは～とらんどハイム本山 ふれあい 春まつり ～子どものまつりづくり～

活動のきっかけ

2017年度の「子どものまちづくり」は、自分たちで考えて活動していくという趣旨を、自分たちが住まう地域で実現していくための取り組み（「まつりづくり」）としていきます。

活動内容概要

コープこうべのサ高住「コープは～とらんどハイム本山」を舞台に、多世代交流を図る地域団体、小・中・高校生、医療生協、障がい者就労施設、サ高住にお住まいの方々、若年性認知症の方々のグループ等々に協力をいただきながら、地域の祭りを開催しました。

1. まつりの形態とすることで、特に地域の子育て層を集客します。
2. 遊びを中心としたスタンプラリーを用意し、高齢者疑似体験や車椅子体験などを組み込むことで、結果として、こどもたちが福祉的な視点を養う機会とします。
3. スタンプラリーの中に、サ高住にお住まいの方やサ高住の職員と子どもたちが交流できる仕掛けを用意し、人同士の関係性を広げ新たな発見を獲得します。
4. コンテンツの中に、駄菓子屋を用意することで、祭り開催以降も、子どもたちが、サ高住に足を運ぶきっかけの一つとします。

協同した団体

- 東灘こどもカフェ
- ろっこう医療生協
にじいろクリニック
- 合同会社こどもみらい探究社

地域の概要

コープこうべでは2015年度・2016年度と「Kids Creative Cityコープこうべ」を開催し、子どもたち自らがまちづくりを通じて社会の仕組みや仕事を学び、自分たちの将来を考えるきっかけを提供するプログラムを進めてきました。まちづくりプログラムでは子どもたちは自分たちで考えた仕事を、準備し、作りあげ、まちづくり当日の運営に取り組みました。



他団体と協同することで発見したこと

東灘こどもカフェとろっこう医療生協にじいろクリニックにはコンテンツ提供と広報を、合同会社こどもみらい探究社には運営支援などを、それぞれ担っていただきました。

協同が協同をよんで、数珠つながりに参加希望団体が増えていき、13団体130人となりました。また、参加団体のメンバー同士がコミュニケーションをとる場面も数多くみられ、今後、参加団体同士の協同が生まれればよいと感じられました。スタンプラリーは自閉症や就学前の子どもも参加できるようにとの提案があり、新たな発見で、少数ですが、製作につなげました。

将来イメージ

参加者数、スタンプラリー参加者数を増やすことを目指して、改善しながら、秋祭り、春祭りと継続的に地域と関わっていきます。今回よりもさらに、多くの団体から参加いただけるようにしていきます。

祭りの際だけでなく、普段から、様々な団体が出入りする場所としていきます。

成果と教訓

成果

- 入場者数
387人（おとな246人、子ども141人）
- スタンプラリー参加
52人（通常版、48人、簡易版4人）
- 運営側人数
130人（13団体、うちコープこうべ職員19人）

教訓

協同を引き出すためには、団体の希望をできるだけ汲み取る姿勢が大切だと気づかされました。祭り当日も含めて、一人が窓口となっていたため、当日のフォローが後手に回ったので、特に当日の窓口担当を適切に配置することが必要だと感じました。

コンテンツによっては、集客が難しい条件となった場合もあったので、前もって、打てる手を検討しておくべきでした。

NPO法人 ファザーリング・ジャパン関西

活動名 | 家族みんなが大喜び！ 頼りになるパパ育てプログラム2017

活動のきっかけ

広く一般市民に対して、お父さんの子育てを支援する事業の一環として、支援者の養成による男女共同参画事業、子育てに関する講演会・セミナー、スクールの開講及び、調査・研究事業、情報誌・機関誌の発行及びホームページの開設による普及啓発に関する事業を行っています。同じ目的を持つ多くの方々の意識を高め、連携を図っていくことで不特定多数の方々の利益を増進し、豊かな地域社会の実現に寄与することを目的に活動を行っています。

活動内容概要

◎父子料理「パパとパパッと簡単パエリア」

日時：2017年11月25日(土)

①10:00～12:30 ②14:30～17:00

参加人数：合計12家族26人



◎パパクエスト

(1回目) 日時：2017年11月12日

12:30～15:00 参加者数：186人

(2回目) 日時：2017年11月26日

10:00～12:30 参加者数：116人

(3回目) 日時：2018年2月24日 10:00～12:30 参加者数：171人

(4回目) 日時：2018年3月3日 10:00～12:30 参加者数：135人



協同した団体

- ◎大阪いずみ市民生活協同組合
- ◎藤井寺市市民生活部協働人権課
- ◎藤井寺市人権のまちづくり協会
- ◎堺市 ◎おうちの買い方相談室 大阪
- ◎学校法人松本学園 菩提幼稚園
- ◎岸和田市社会福祉協議会
- ◎岸和田市ボランティア連絡協議会
- ◎大阪狭山市 ◎大阪狭山市立公民館
- ◎大阪狭山市人権協会

地域の概要

イクメンという言葉が定着してきましたが、まだまだ子育てを母親一人で行う孤育て家庭は多い状況です。男性の家庭回帰、地域参画を進めていくことが、家庭や社会で女性が輝くことにつながり、同時に地域が元になり、子どもの笑顔がもっと増えていくことになります。



他団体と協同することで発見したこと

大阪いずみ市民生協とは協働運営協議会を立ち上げ、プログラムを協働で実施しました。

2016年度に続き、4市でパパクエストを開催しました。今年度は、自治体から声掛けいただいた地域でも活動を行いました。FJKメンバーが行政や他団体とのつながりを育み、その上で地域のパパ・ママたちと他団体の方々との橋渡し役となることを意識して取り組みました。

藤井寺市ではママ向けの講座と同時開催し家族の来場を促しました。共催した人権イベントへの集客につながり、子育て世帯への人権問題の啓発にもつながりました。堺市では幼稚園の会場をお借りでき、参加者への幼稚園の取り組み等の周知につながりました。岸和田市では、車いす体験や募金活動も行い、ボランティア連絡会の取り組みを知らせることができました。大阪狭山市では、公民館と協働し子育て世代への人権問題の啓発につながり、翌月の市報の一面にも取り上げられました。

将来イメージ

このロールモデルを広め、同時に、各地においてさらに深めていきたいです。地域での関係性をより一層意識した内容にしていきます。生協とのつながりをさらに深め、地域での行政、地域団体、また、パパ・ママたちとの関係を充実させつつ、我々が橋渡し役となり、斜めの関係の構築にもつながっていききたいです。

人と人との関係性を広め、深めていく中で、大阪いずみ市民生協、地域団体、市民、行政、それぞれとの橋渡し役、活性化の担い手になれるよう努めます。男性の家庭回帰、地域参画をより一層進め、女性と子どもが生き生きする社会の実現につなげていきます。

成果と教訓

成果

総勢634人にご参加いただき、生協をはじめ各協力団体の方々23名の皆さんとつながることができました。

パパの子育ては義務ではなく期間限定の特権で、とても楽しく素晴らしいことだと参加者に伝わったと思います。父親が子育てを楽しみ、父親同士がつながったことが、「女性と子どもが生き生きする」社会の実現にもつながっていくと考えています。また、プログラムの継続が協働を育み、地域をより元気に盛り上げていくことがわかりました。

大阪いずみ市民生協では、市の広報や他団体の媒体を通した広報により、今までと違うターゲットへの働きかけができました。他の地域団体の取り組みや思いを、多くの参加者に伝えることもできました。

結果、市民、行政、関係諸団体、大阪いずみ市民生協、FJKが多様な関係性を深めていくことにもつながりました。

教訓

行政による協働への温度差は依然あったものの、基本的には実施に前向きでした。地域における女性活躍推進の課題に対して、父親が子育てに積極的に関与することの意義を理解いただけたところでは継続実施ができました。継続して開催した地域では昨年度より広報に力を入れていただくことができ、継続の必要性を感じました。

ISC糸島スポーツクラブ

活動名 | コミュニティカフェ寄り合い処プロジェクト

活動のきっかけ

親子で一緒にふれあう場や家族間交流の場が減り、子育て中の親の孤立による悩みや問題の内在化や、子どもたちの多くがTVやゲームに熱中し実体験の時間が減少などの状況が見られます。そうした問題を抱えた親子の交流の場が求められており、「グリーンコープ生協いとしま店」の一角を交流・体験及び発表の場として有効活用したいと考えました。また、地域の相談窓口、様々な「人」や「情報」を紹介し、年間を通して人の輪をつなげていく地域コーディネート役の役割も発揮していきます。

活動内容概要

- ・5団体をメインとし、その他7団体とも連携し開催しました。
- ・音楽／創作工房／料理教室／健康&レクを取り入れた教室を7回開催しました。
- ・参加者数：272名（子ども169名、大人103名）
運営講師：72名（講師：17名、スタッフ：55名）
総参加者数：344名



協同した団体

- グリーンコープ生活協同組合ふくおか いとしま店
- コミュニティカフェ&デリ ことこと
- いとすき講師会
- 九州大学 次世代ものづくりプロジェクト

地域の概要

糸島市はこれまで以上に都市化が進むとされていますが、一方で少子高齢社会は確実に訪れ、まちづくりに影響を及ぼすことが懸念されています。生活の利便化や高齢化により「体を動かす」「コミュニケーションの輪を広げる」機会や場所が少なくなり、住む人の顔が見えなくなる心配があります。明日の糸島を担う子どもたちの生活も、部屋から出ない子、友達づくりが苦手な子、元気に遊ぶ子とそうでない子の二極化の拡大、生活習慣病の増加など、問題が深刻化していくと思われます。より一層、地域社会でのつながりが求められています。

糸島には美しく豊かな自然があります。スポーツには、人を育む力があります。文化活動には、人をつなげる力があります。糸島地域は、従来から人の繋がりが強くコミュニティが残っているといわれています。糸島の自然環境を大切に守り、生涯スポーツや文化交流の推進と世代を超えた交流を通じて、「心身ともにたくましい子供たちの育成」、「誰もが繋がりが合え、安心安全で健康な暮らしができるまちづくり」に貢献することを目指しています。

他団体と協同することで発見したこと

- グリーンコープ生協ふくおか いとしま店には、会場の設定と諸準備、ならびに当日の関係者との調整を行っていただきました。
- 昨年度より、各種団体との連携事業を増やしましたが、本事業は関係する団体だけで12の諸団体と連携しての実施となりました。
- 参加者への呼びかけも自団体だけでの対応時に比べ、各団体からのSNS等を通じての協力もあり、広がりを見せたと思えます。
- 各種教室の指導講師陣との連携も深まり、参加者を通じ団体の認知度もUPしました。
- 運営スタッフの相互支援イメージでの協力関係もできつつあります。

将来イメージ

今回の事業を通じ、共催団体のみならず、新しい連携の輪が広がりました。

今回だけの事業とせず、更なる連携の輪を広げ地域コミュニティネットワークの拡充を目指します。併せて、地域活性化と人材の育成構築へと連動しゆく《地域トータルデザインプロジェクト》の立上げを目指し、事業の継続可を図りたいと思います。

成果と教訓

成果

新しい多くの方々に参加いただき、無事故で楽しく開催できました。

教訓

- 一点目標を達成できなかった分野は、シニア対象の「健康エクササイズ」です。市老人クラブやシニア諸団体へ呼びかければ良かったのですが、コープの来店者だけで募集人数に達するとの思いから未周知でした。結果、参加者が子ども中心となり少なかったのが残念です。今後、シニア対象の教室&イベント開催時には更なる工夫と事前手配が必要であると実感しました。
- 「あったかコンサート」は残念ながら想定した人数が集まらず、会場選定に誤判断が有りました。事前広報としてマスコミや市広報掲載等ができなかった事、及び地域行事が多数重なって参加者が分散してしまったことが反省点となりました。

生活協同組合コープみらい 地域クラブひだまり

活動名 | いじめ・不登校・ひきこもりから地域・社会のつながりへ

活動のきっかけ

相談・学習できる場として、医師・親・教員・生協会員・地域の人々などが呼びかけて発足しました。以後親の会・講演会を積み重ね、親たちの要望でさらに子どもの居場所づくり・運営をしています。

活動内容概要

- ・若者支援の農業体験活動
- ・子どもの居場所活動
- ・自然の中での夏合宿の実施
- ・講演会、親の会、電話相談・個別面談への対応
- ・登校拒否・不登校全国のつどいへの参加と学び、地域への還元

協同した団体

- 不登校問題を考える東葛の会『ひだまり』
- 青空の会(我孫子)
- 学校に行かない子を持つ親の会 吉川

地域の概要

いじめその他、つらく苦しいことがあって、学校や外、仕事に行けない、家にひきこもっているという子ども・若者は、年々増えています。相談・支援箇所はまだまだ少なく、親が安心して相談出来、学べる場所が必要です。そして、子ども、若者が安心して過ごせて、心のキズを癒し、希望を膨らませる居場所としての役割をさらに発展させたいと考えています。また今年度は当事者の子どもや若者が、家庭から学校・地域・社会へと踏み出せるように支援する活動(農業体験)を展開していきたいと考えました。

他団体と協同することで発見したこと

- ①4団体が農業体験・行事・講演会などを協同で企画実施し、より大きな力を発揮でき、地域への広がりも深まりました。
- ②お互いの団体の活動から学ぶものが多く、参考になりました。
- ③4団体の協同により、子ども、親たちが抱える悩み苦しみや地域の課題が、さらに見えるようになりました。今後の取り組みに向けてまた力を合わせたいと考えています。

将来イメージ

- ①農業体験活動では、青年たちのアイデアを生かして生産や販売の活動を充実させたいです。ひだまりカフェなどでさらに地域の人たちと、新しい出会いをつくりつながりを深めていきたいです。青年たちが働く場として経済的支援ができるよう収益を上げていきたいと考えています。
- ②居場所を利用する子どもも相談者の子どもも年齢が高くなってきており、就労を含めて「社会につながる活動」に向けて支え、応援する事業を進めていきたいです。
- ③子どもの居場所活動、就労応援活動、親の会活動、電話や来所相談、進路就労相談など、事業をさらに展開して欲しいという要望があり、世話人やサポーターを広く求めるとともに、研修や学ぶ機会をつくってお互いに力を育てていきたいです。
- ④これまでの成果を広く地域や行政に伝えることで、どんな働きかけや連携ができるのか探っていきたいと思います。

成果と教訓

成果

- ①農業体験を開始し、7人の若者が毎月2回、農作業・収穫を行いました。販売活動、ひだまりカフェも行い、地域の人たちとつながり、人への安心感や信頼感を持てるようになってきました。また、これから自分が歩む道を見つけようと模索するようになってきました。
- ②子どもの居場所を年間134日開き、子どもは延べ840人、大学生ボランティアは35人が登録し延べ418人が参加し交流しました。夏合宿やイベントを子どもたちと共に計画しました。
- ③電話相談は、年間総数100回ほど、個別面談は50人ほどあり、1～3時間丁寧にお話をうかがいました。理解・見通しが出来て安心が生まれていきます。
- ④4団体の毎月の親の会には、年間延べ約300人が参加し、悩みや心配ごとを出し合い交流しました。
- ⑤講演会を2回実施し、計107人が参加しました。
- ⑥毎月の事業活動の様子・講演記録・作成資料等を配布し多方面の方にご覧いただきました。
- ⑦子どもたちが交流し学びあい、親たちが子どもとの関わりを理解していく中で、学校に行くようになる、高校受験を目指し合格する、ボランティアをしたい、働きたいと社会につながるように変化していきました。

教訓

- ①悩み苦しんでいる子ども・親、かつて苦しんだ親、そして教員・元教員、相談員、医師などが、交流し学び合う活動は、とても大事な活動であることを再認識しました。
- ②一人ひとりの状態を理解し、適切に関わることで、子どもも親たちも元気を回復していきました。難しいケースも多く、もっと勉強を積み重ねます。
- ③子ども・若者たちの意欲ややる気に依拠し、楽しみながら活動することで、大きなエネルギーを発揮し、成長することがわかりました。今後も彼らの思いや声に耳を傾けながら、活躍できる場や活動をつくっていきます。
- ④多くの団体、多くの方々と手をつなぎ力を合わせることで、課題が切り開かれて行くことを体験しました。

特定非営利活動法人 生涯学習サポート兵庫

活動名 | 地域ネットワークを活かした「共助」し合える居場所づくり～ここからカフェ～

活動のきっかけ

「地域でゆるやかに支えあう場」を多世代の人々の手で作り、地域における課題に対して共通認識をもち、取り組むことで、地域の人々にとっても親子にとっても必要なコミュニティを構築していきます。その過程を通して、地域の中で子育てや地域課題解決に携わる団体間のネットワークが強化されていきます。

活動内容概要

「コープのつどい場（以下、つどい場）」を拠点に、「親子」「子ども」「地域」「居場所」をキーワードに事業を行いました。

関係団体同士のネットワークの構築ができ、特にコープこうべ第7地区活動本部、姫路市社会福祉協議会、納屋工房と当団体の四者は、月1回程度のミーティングの場で、地域に必要な支援について考え実行に移すことができました。

具体的に行った事業は下記のとおり

◎つなカフェ

- ・9/19「食を通じた居場所づくり」 ・12/4「まちの居場所のつくり方」
- ・2/21「二階町商店街の取り組みから」

◎居場所コーディネーター養成講座（つながる居場所のつくり方講座）

- 1回目）今、居場所が必要なワケ？ 事例紹介／実践者の話を聞いてみよう！
- 2回目）居場所づくり運営のポイント／チラシづくりのコツを学ぼう
- 3回目）1DAYまちかどカフェをやってみよう！／
居場所・まちかどカフェのマネジメント

◎防災アカデミー

- 1/28 はりま子育て応援フェスティバル内で
「減災リュックをつくろう！」を開催

◎おしゃべりカフェ ◎カタリバカフェ

協同した団体

- 生活協同組合コープこうべ
第7地区活動本部

地域の概要

自治組織がしっかりとしており、既存のコミュニティの中に子育て世代が入っていくハードルが高い地域です。一方、子育てをする母親自体も地域の一員という意識が低く、いざというときに「助け合える」関係性ができていません。

また、起業したりネットワークを広げる母親が多い地域でもあり、それらと自分自身を比べてしまうことで、子育てに孤立感を感じる親も多いという現状です。



他団体と協同することで発見したこと

自分たちだけでは把握できない、地域のニーズを知ることができました。各々が「つよみ」を生かす中で、役割分担が自然となされ、予想外の副産物もうまれました。また、協同団体以外の団体や個人ともつながることができました。

将来イメージ

- 団体や人が「参加する側」から「企画する側」へ移行していくことで、新たな取り組みが始まったり、地域の支援ネットワークが広がっていくと考えます。様々な人（団体）のチャレンジを応援できる仕組みを作っていきたいと考えます。
- つどい場が広い年齢層のみなさんに認知されることで、自然に地域三世代交流や学び合いの時間がうまれることを期待しています。そのためのきっかけ作りを今後も続けていきたいと考えています。

成果と教訓

成果

様々な年代・ジャンルで構成された参加者同士がその後も連携することで、地域の子ども食堂のネットワーク化が進んだり、学習会が行われたりと「問題意識」を共有する人や団体が「つながる」場となりました。

【参加者など】

- つなカフェ のべ24名
- 居場所コーディネーター養成講座
のべ参加者10名／1DAYまちかどカフェ来場者53名
- 防災アカデミー（減災リュック作り）参加者24組
- その他
- ・はりま子育て応援フェスティバル：参画団体9団体（他企業団体もあり）。
来場者数300名
- ・ひめじこども食堂ネットワーク（仮）：現在5団体が参画予定。今後広がっていきます。

教訓

- 自治組織が活発な地域で「よそ者」である私たちが活動していくには、「一緒に」考え行動していくことが大切であることを再認識しました。
- 「つなげる」人（団体）がいないと、何事もスタートしないこと。「何かしたい」と考えている人は地域の中に少なくありませんが、複数の団体が「協同」することで、その方々が行動に至るまでのハードルを下げるのができたように思います。

ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟

活動名

生協職員・組合員及び地域住民に対して、
女性へのDV被害をはじめとする人権侵害防止の啓発及び相談・支援事業

活動のきっかけ

被害を受けても4割の人が相談していないことから、身近で相談しやすい機能を持った場所の提供が重要であると考えています。

健康的で働きやすい職場環境や誰もが生き生きと暮らせる地域社会を形成していくためには、DV等の人権侵害を根絶することが求められています。

活動内容概要

当生協の職員や組合員及び地域住民の方々を対象にして、DV被害をはじめとする人権侵害に対する女性への啓発及び相談支援事業を実施するために、以下を実施しました。

1. 当生協の事業所の管理者及び職員等並びに地域住民等にたいして、DV防止等の人権侵害防止の啓発を目的とした研修会の開催
2. 当生協の組合員及び事業所のある地域住民に対して、DV被害等の電話による相談窓口の設置
3. 上記の相談を行うために、当生協の女性理事に対する電話相談の研修会の開催

協同した団体

◎NPO法人 女のスペース・にいがた

地域の概要

2014年度の内閣府の調査によれば、約4人に1人が配偶者からの暴力を受け、10人に1人が何度も暴力を受けているとの結果が出ています。また、交際中のカップル間でも、5人に1人が交際相手から暴力を受けています。そして、その4割の人はどこにも相談をしていません。

こうしたことを考えたときに、当生協の職員（約240名）や組合員（約1,300名）の中にもDV被害等にあつてゐる人がいることが推察され、また、事業所がある地域や職員、組合員の居住している地域においても同様の被害にあつてゐる方がいるものと考えられます。

他団体と協同することで発見したこと

NPO法人 女のスペース・にいがたには、電話相談・支援の指導を担っていただきました。

無償ボランティア活動を主体としているNPO法人の相談員の活動を拝見し、その報酬の多寡では測れないモチベーションの高さとスキル充実に感銘しました。

成果と教訓

成果

相談件数としては5件という少ない件数でしたが、研修や新聞広告等で、当生協職員や組合員及び地域住民に対するDV防止についての人権侵害防止への啓発が進み、相談・支援を実施することで、DV等による人権侵害の防止及び解決が図られたと思われます。

教訓

当生協内に設置した「よろず相談センター」の事業にとって、たいへん参考になりました。

特定非営利活動法人 ポトスの部屋

活動名 | 子ども・若者への居場所の提供と生活困難家庭の中学生らの学習支援並びに相談活動

活動のきっかけ

不登校や引きこもり等の子どもや若者に安心して過ごせる場所を提供することで、学校や社会に出る準備期間となるよう、2011年に開所しました。しかし、保護者からの相談はあっても子ども自身の利用は少なかったため、生活保護家庭の中学生を対象に無料学習支援を始め、その後対象をひとり親家庭の中学生まで広げました。

活動内容概要

1. 居場所活動 (ポトスの部屋)

高校入学を目指し、学習支援を希望する場合はマンツーマンの支援をしています。

火・水・金 14:00～17:00

2. 無料学習支援活動 (3ヶ所、週4回)

3. 相談活動

相談内容は多岐に亘り、生活相談や子育ての悩み、発達障害等はポンペミンタルとポトスの部屋のスタッフの社会福祉士による面談を実施しています。高校進学等の進路相談については主に元教員が対応しています。



協同した団体

- みなと医療生活協働組合
- あいち定時制・通信制父母の会
- ポンペミンタル

地域の概要

少子化にもかかわらず、不登校や引きこもりの子ども・若者は依然として減少する傾向にはありません。本人も保護者も将来の見通しや希望が持てずに苦しんでいます。引きこもりの若者の増加は社会的にも大きな損失です。子どもの貧困率の高さは社会問題になっており、法整備も進んではいますが、具体的に適切な支援はなかなか進んでいません。地域でできることから始めることが喫緊の課題です。

他団体と協同することで発見したこと

- ①ポトスの部屋が使用している生協の診療所で地域の人が「子ども食堂」を始めました。中学生の不登校に悩む親御さんについて、受診⇒子ども食堂利用⇒学習支援へとつながるケースも生まれ、医療生協の職員にも子ども食堂の方からも喜ばれました。
- ②みなと医療生協の機関紙を見て、近所の方が協力に来てくれるようになりました。
- ③家庭の諸事情で高校を中退した子について、協同団体から詳細な情報・アドバイスを得て、夜間定時制高校を受験できました。
- ④発達障害や外国籍の子の相談もあり、専門的知識と経験を持つ所との連携が重要です。

将来イメージ

諸団体との交流会に参加しています。先日「子どもの学びを地域で支援する共同研究会(仮称)」の準備会に参加した中で、「学習支援・子ども食堂・居場所づくり」について、民間の助成金や善意の寄付金、善意のボランティアだけに頼るのではなく、行政への「政策提言」にまで持って行かねばという話を聞きました。上記の共同研究会で学びながら、ネットワークづくりに参加していきたいと思っています。

成果と教訓

成果

①居場所活動 参加者実数：子ども5人 スタッフ7人

- ・3年半学習支援した子が公立の通信制高校を3年間で卒業できました。
- ・外国籍の子が学校とのトラブルから不登校になりました。ポトスの部屋に来て学習支援をする傍ら、学校との話し合いの結果、登校できるようになりました。
- ・高校中退した子がアルバイトを始め、夜間定時制高校を受験しました。

②無料学習支援活動

参加者実数：子ども21人 学生サポーター7人 スタッフ25人

- ・学習支援に来ていた中学3年生7人が全員高校に合格しました。

③相談活動 51件

④その他

- ・高校入学後も引き続き来る子が増え、居場所としての役割が大きくなりました。活動の中から自然にこのような場ができたことが活動の一番の成果だと思います。高齢のスタッフにとっても居場所であり、子どもたちの成長が生きがいになっています。

教訓

- ①学校との連携では、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーにポトスの部屋を見学いただきました。今後もつながりを強めていきたいです。
- ②家庭の事情で入所した施設から学習支援に通ってきているきょうだいがおり、施設との連携の必要性も出てきました。
- ③夜間大学が減り、多額の借金になる奨学金も積極的に勧められない中、進学をあきらめる子もいて、大学進学の問題が課題になってきました。
- ④外国籍の子どもの学習支援について、言葉の細かいニュアンスが伝わらないことや、日常言語と学習言語の違いなどがあり、今後の対応方法が課題です。

NPO法人 福島の子どもたち香川へおいでプロジェクト

活動名 | 福島とその近県の子どもたちの保養プログラムと避難者支援および広報・啓発活動

活動のきっかけ

放射能の不安の中で暮らしている福島の子どもたちに、香川の自然の中で子どもらしい時間を過ごしてもらおうとともに、香川県内に福島の状態に心を寄せる人たちの輪を広げ息長く支援を続けることを目的としています。

活動内容概要

◎2017年夏休み保養

7泊8日間で小豆島ヘルシーランド保養研修所に子ども15人(小3～小6)が滞在し、海水浴、釣り、和太鼓体験、お絵描きワークショップなどの活動をしました。多くの学生さんがボランティアとして参加。

◎2017高松市男女共同参画市民フェスティバル

「原発事故6年目 現地情報から読み解くふるさと福島」

2017年12月2日に、20名が参加し、福島市在住の元・徳島文理大薬学部教授の佐藤政男さんに「福島の今」を報告いただきました。

◎高松市民活動センター壁面に活動報告パネルを展示(2018年2月2日～28日)

◎写真展・講演会「見て、聴いて、考える 7年目の福島」

2018年3月2日(金)～4日(日)、瓦町FLAG8階にて広河隆一さんの写真と「DAYS JAPAN」の福島関連記事のパネルを展示。4日には東日本大震災避難者の会Thanks&Dream代表・森松明希子さんの講演会「母子避難 心の軌跡」も開催。写真展には約100名、講演会には約50名が参加。

◎コープ自然派しこく「オーリーブフェスタ」で活動報告パネル展示

◎2018年春休みホームステイ

7泊8日間で県内6軒のホストファミリー宅に子どもたち計12人(小2～中1)が滞在し、女木島ハイキング、うどん打ち体験、スポーツ・レクリエーションなどを行いました。

◎「おいでハウス」(生活用品のそろった民間住宅)を利用した支援(通年)

2軒に年間で6家族15人が滞在し、移住のための家探しなどを支援しています。福島からの移住者の両親が香川を訪問する際にも利用されています。



協同した団体

- ◎香川県 ◎高松市
- ◎香川県教育委員会
- ◎高松市教育委員会
- ◎生活協同組合コープ自然派しこく
- ◎香川大学ローターアクトクラブ
- ◎香川大学写真部
- ◎香川医療生協
- へいわこどもクリニック

地域の概要

福島では甲状腺がんとその疑いと診断される子どもが増え続け、すでに183人(2016年9月現在)と、多くの子どもや保護者が不安を抱えながら暮らしています。一方で福島第一原発事故から6年を経て記憶は風化しがちで、他県では誤解や無理解から避難している子どもへのいじめ事件も起きています。避難地域外からの避難者への家賃補助が2017年3月で打ち切られますが、福島に戻っても、せめて子どもを保養に出したいという保護者も増えることが予想されます。



他団体と協同することで発見したこと

これまでも香川大学ローターアクトクラブの学生さんには毎回、ボランティアでご参加頂いてきましたが、香川大学写真部の学生さんたちにも初めてご参加頂き、写真を高松市民活動センターに展示しました。来場者にもとても好評で、学生さんたちにも発表の場を得たことを喜んで頂きました。若い人たちの力を発揮できる場を作っていくことが大切だと改めて実感しました。

将来イメージ

震災の記憶や被災地への思いを風化させず、「福島と香川をつなぐ」息長い活動をすることを目指しています。今後は次第に各種助成金など減り、財政面では厳しくなると思われますが、持続可能な活動を模索します。また、活動報告ニュースの発行や様々な機会をとらえての活動報告パネル展示、被災地の現状を知るための講演会など、情報発信に努めますが、その際、幅広い団体と連携して活動することが大きな力になると思います。

成果と教訓

成果

参加者数はのべ800名を越えました。2017年は、これまでの参加者に「ヤングボランティア」での参加を呼び掛けたところ、2011年から何度か参加された高校生の参加があり、お兄ちゃん役として大活躍してくれました。活動後、「以前お世話になった人たちに再会できてめっちゃうれしかった。このプロジェクトに参加したおかげで今の自分があるんじゃないか、とさえ思う。今じゃ香川が自分の第二の故郷みたいなもの。ずっと関わり続けたい」というメッセージをもらったことも、とてもうれしいことでした。子どもたちの成長過程に関われる喜びは、この活動が続けていく大きなエネルギーです。ボランティアの数ものべ400名を超えて、香川の中で支援の輪が広がっていることも大きな力になっています。

教訓

今回も地元自治体や地元教育委員会の名義後援を受け、写真展と講演会を各所でお知らせできました。次第に震災関連の報道も減り、関心が低くなっているからこそ、きちんと発信することが大切です。SNS等をもっと活用しながら、地道に広報活動に取り組むことが大切だと感じています。

NPO法人 福島SAND-STORY

活動名 | 福島県の子どもの肥満防止等健康づくりのための屋外遊びと生活改善プロジェクト

活動のきっかけ

2011年の東日本大震災とそれに伴う原発事故の影響により、野外活動や砂遊びに著しい制限を受けた地域の子どもたちに対して、砂場環境の取り戻しと新たな楽しい砂遊びの機会の創造について話し合った「福島インドア砂場サミット」（2013年）を契機に本団体が結成されました。

活動内容概要

1. 「砂の遊びとアート」イベントの実施：大量の良質で安全な福島産の砂を用いて親子・市民が楽しめるサンドアートイベントを福島市で3回、いわき市で1回の計4回開催。会場では、コープふくしまによるホスピタリティ空間を設置して来場者に休息の場を提供するとともに、子育てや食育、健康・生活習慣改善に関するアドバイスをを行いました。
2. イベント終了後の砂の提供：イベントで用いた砂を保育・教育施設等に提供し、砂遊びの広がり伝えるミニ研修と食育や生活改善アドバイスのフォローを行いました。
3. 福島「砂」シンポジウムの開催：福島県の貴重な自然資源である砂の、子どもの健康や町づくりのための活用の可能性を話し合うシンポジウムをいわき市にて開催しました。



協同した団体

- 生活協同組合コープふくしま
- NPO法人 いわき鳴き砂を守る会
- 福島駅前元気プロジェクト委員会

地域の概要

震災後、原発事故は福島県内の一部に野外活動の制限をもたらしました。多くの子どもたちは室内中心の生活を強いられ、日常の運動量は大きく減少しました。その後、一定の野外環境の改善は進みましたが、室内での生活は習慣化され、多くの保護者もそれを許容しています。その結果平成28年度の子どもの肥満度は全国平均の1.5倍、全国ワーストワンとなっており（文科省調査）、成人病予備軍の増加という深刻な問題に直面しています。幼児期から豊かな野外遊びや活動を通して体を動かす機会を増やすとともに、保護者への子育て・生活習慣に関する意識の変革が喫緊の課題となっています。

他団体と協同することで発見したこと

- 子どもの健康や育ちに関する活動テーマは同じであっても、多様なアプローチの仕方や内容があることを知り、学ぶことができました。
- 他団体がそれぞれに関係を持つ人々や団体との新たなつながりが生まれました。
- 団体組織の運営方法について、他団体から新たな知見を得ることができました。

将来イメージ

- 子どもたちや親子が屋外で遊び、体を動かすことの楽しさを実感すること。
- 子どもの豊かな育ちに対する保護者の意識を高め、具体的な生活習慣の改善につなげること。
- 避難住民や他府県からの帰還者と既存住民との交流や、新たな地域コミュニティの形成につながる。
- 継続的なサポートの蓄積により、市民の子育てや生活習慣改善の課題、支援態勢及びサポート方法をより確実なものへと高め、子どもたちの肥満等健康問題解決の突破口となっていくこと。

成果と教訓

成果

- 4回の「砂の遊びとアート」イベントでは、延べ約3,500名の来場者があり、親子での楽しい時間を過ごしてもらうことができました。
- ホスピタリティ空間での子どもの健康づくりのための生活改善アドバイスをおよそ100名の来場者に行いました。
- 良質な砂を、15の幼稚園・保育所、小学校に提供し、アフター研修のフォローを行いました。

教訓

いわゆる「ほうれんそう」といわれる報告・連絡・相談のなかでも、特に報告と連絡を密に取ることの重要性がわかりました。

地域ささえあい助成

— 生協と他団体が協同する活動を応援します —

2017年度 募集のお知らせ

CO・OP共済は、「自分の掛金が誰かの役に立つ」という組合員どうしの助け合いの制度です。コープ共済連はCO・OP共済を通じて豊かな社会づくりをめざしています。その活動の一環として、生協と地域のNPOやその他の団体が協同して地域の暮らしを向上させる活動を支援します。全国の生協、NPO、その他の団体の皆さまからの多数のご応募をお待ちしています。

応募期間

※終了しています。今後の募集はホームページをご確認ください。

2017年2月1日
～3月5日

応募条件

活動テーマ

以下①～③の対象となる活動のテーマいずれかに該当すること

必須条件

生活協同組合とNPO・ボランティア団体等が協同した取り組みであること

対象となる活動のテーマ

①「暮らしを守り、暮らしの困りごとの解決に資する」

例 地域住民による高齢者等への生活支援のコーディネート、障がい者の就労支援、震災による避難者へのカウンセリングの取り組みなど

②「命を守り、その人らしい生き方ができるようにする」

例 病気やケガで治療中の方やそのご家族への治療に専念できる環境の提供や、治療における精神面でのサポートを通して生活の質の向上を目指す取り組み、病気の予防や早期発見を目的とする啓蒙活動など

③「女性と子どもが生き生きする」

例 子育てひろばの開設・運営、出産後の再就職や社会復帰を支援する取り組み、DV被害者からの相談を受け付ける活動など

必須条件～生協と他団体の協同～

次の①、②いずれかを必須とします。

- ①生活協同組合以外の団体(NPO法人等)が応募し、活動内容が「生活協同組合と協同して行うもの」である
- ②生活協同組合が応募し、活動内容が「生活協同組合以外の団体と協同して行うもの」である

- 日本国内を主たる活動の場とする団体を対象とします。
- 今後設立予定の団体でも構いません。
- 「協同して行う」とは、受注委託の関係ではなく、対等平等で企画を一緒に作り、ともに活動する関係をいいます。

〈対象とならない活動〉— 以下、例 —

- ※左記の①～③のいずれのテーマにも合致しない活動(環境問題等)
- ※生活協同組合同士の活動(100%子会社も含む)
- ※生活協同組合単独もしくはNPO単独の活動

対象となる活動期間

2017年度は、原則2017年4月1日～2018年3月31日の間に実施する活動が対象です。なお、審査委員会が認めた活動に限り、複数年の活動に対して助成を行うことがあります。

助成内容

助成額は、1事業あたり最大100万円を基本としますが、審査委員会が認めた活動に限り、それ以上の助成額になることがあります。

助成総額は2,500万円を予定しています。

●助成の対象となる費用●

- 活動に直接関わる経費（資材費、消耗品購入費、旅費、交通費、印刷製本費など）
- 謝礼金（講師謝礼、指導料など）

●助成の対象にならないもの●

- 飲食費、接待費、保険料、人件費
- 助成を受ける事業以外の運営に係る費用
- 営利を目的とする事業
- その他、審査委員会が不適切と判断したもの

活動報告

助成を受ける団体には、活動報告書をご提出いただきます。その他に、活動状況のヒアリングや取材受け入れをお願いすることもありますので、ご協力をお願いいたします。

活動報告は、コープ共済連のホームページや冊子等に掲載し、ご紹介させていただきます。

応募方法、提出書類

①応募用紙の入手方法

コープ共済連のホームページよりダウンロードいただくか、下記のお問い合わせ先まで電子メールかFAXにてご請求ください。

URL <http://coopkyosai.coop/about/csr/socialwelfare/2017.html>

※ご請求の際には、団体名、郵便番号、住所、送り主の方の氏名、電話番号を明記してください。

②応募方法

応募にあたっては、以下の書類を事務局宛にご送付ください。(Email、郵送のみ可)

応募団体へは事務局から書類受領通知をメールにて行います。3月末までに受領通知が届かない場合、事務局までお問い合わせください。

※FAX、持参による提出は受け付けておりません。

- 応募用紙
- 定款など

(定款は応募団体がコープ共済連の会員生協である場合、ご提出は不要です。ご不明な場合はご相談ください)

お問い合わせ先

日本コープ共済生活協同組合連合会

渉外・広報部

地域ささえあい助成事務局宛

TEL 03-6836-1320 (平日10:00~17:00)

FAX 03-6836-1321

メール contribution@coopkyosai.coop

応募書類提出先

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-1-13

コープ共済連 渉外・広報部

地域ささえあい助成事務局宛

過去の助成団体活動内容はホームページでご案内しています。

コープ ささえあい 報告集 検索

URL <http://coopkyosai.coop/about/csr/socialwelfare/report.html>



応募スケジュール

■応募期間：2月1日～3月5日

■審査委員会：4月

■結果通知：6月上旬

(第一報はメールで通知します)

■助成金の振込：7月下旬

CO・OP共済 地域ささえあい助成 2017年度 活動報告集



発行日：2018年9月

発行元：日本コープ共済生活協同組合連合会
(渉外・広報部)

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-1-13

電話 03-6836-1320



この印刷物は
植物油インキを使用しています。



見やすく読みまちがえにくい
ユニバーサルデザインフォント
を採用しています。